
一異伝一魔法少女リリカルなのはStrikers～男たちの鎮魂歌～

嗣貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ⅰ異伝Ⅰ魔法少女リリカルなのはStrikersⅠ男たちの鎮魂歌Ⅰ

【Nコード】

N2569W

【作者名】

嗣貴

【あらすじ】

二次創作版リリカルなのは

プロローグ

「…さて、どうしたものか」

ミッドチルダの首都、クラナガン。

様々に存在する世界。その横軸を支配している時空管理局の本局において、男——ラムザⅡトラバントは一通の書類を前に頭を抱えていた。

「ラムザって彼女たちと何か繋がりでもあったっけ？」

「あるわけねえ」

「だよねえ」

現在時刻は地球の時間表記にして約十二時三十分。

時空管理局本局内にある食堂にて対面に座る同僚カイルⅡバルカスと食事をとりながら、ラムザはもはや怪奇文章としか思えない手紙について意見を交わす。

「次元世界の管理者にして我らが時空管理局の切り札との呼び声高い才媛に、どうして一職員に過ぎない俺なんかが知り合ってたんだよ」

「いや、分からないよ。人と人との出会いは一期一会。何かの間違いで知り合うかもしれない」

「ねえよ」

「知り合う切っ掛けなんて誰にも分からないものさ。神様の紡ぐ運命を誰も分からないのと同じでね」

絶品と評判のカルボナーラをフォークに巻き付けながらカイルが言う。

「生まれた世界も違うし働いている部署も違う。事実、俺は今まで彼女やその友人たちの誰一人として見る機会さえなかったがな」

「それはきつと今回のための我慢期間だったんだね」

「それはまたポジティブな話だ」

「今のラムザみたいなネガティブな顔よりも幾分マシさ」

「はいはい。そうですね、と」

相槌をうちながら、ラムザは注文したサンドイッチを口の中へと放り込んだ。

確かに物事を考える場合、往々にしてしてネガティブな方へ思考を向けるよりもポジティブな方へ思考を向けた方がいい。

ネガティブな思考からは当然ながらネガティブな帰結が生じやすい。ならばまたその逆も然り。所詮は確率論でしかないが、人間精神一般には多大な影響がある。

「でもなあ…」

尚もため息をつくラムザ。

自分のことならラムザはここまで悩まない。何故ならどう判断した

としても、リスクもリターンも返ってくるのは自分だからだ。

しかし他人のこととなると話は別。それが家族に関わることならば余計に明朗快活な判断は難しい。

「お兄ちゃん”は大変だね」

「うっせ」

手紙に書かれている宛名は『ソフィーナⅡトラバント』。即ちラムザと“血の繋がった”妹だ。

普段はそんな素振りを見せないが、カイルはラムザが愛家族家であることを知っている。

だからラムザが二人しかいない兄妹として妹の世話をよくみていることも知っている。

そんなカイルだからこそ、こうしてラムザの相談に乗ることが出来る。

「ソフィちゃん彼女の大ファンだし、この手紙の内容を知ったらたぶん有無を言わせず異動願いを出すんだろうねえ」

「それだけは間違いない」

「心配だよねえ」

家族ぐるみ、というよりは兄妹ぐるみで付き合いのあるカイルにとってもソフィーナは実の妹のような存在だ。

家族が危険な目にあうことがわかって以上、止めたいと思うことが愛情というものだろう。

少なくともラムザはそう思っている。

「手前で差し止めては見たものの、結局最後はソフィの心次第だな」

「まあね——て言うか、ソフィちゃんは僕らよりも強いしね」

あんまり心配しても無駄かもねと戯けるカイルに、ラムザは悔しそうに顔を歪める。

兄であるラムザの魔導師ランクは総合B、陸上ならばA。

時空管理局の魔導師の中では中の上程度の実力を持っていると言ってもいい。

つまりラムザ本人は特に強調して弱いという訳ではないし、むしろどちらかといえば若い頃によく行っていた喧嘩の力をプラスすれば強者に属する。

それでも妹であるソフィーナには魔導師ランクの単純計算では勝てない。

ソフィーナはトラバントの時空管理局所属魔導師バンクへ登録されている魔導師ランクは総合AAA、空に限ればSに届く。

いわゆる天才。並みの魔導師しか生まれたことのないバルカス家に生まれた突然変異。

それがソフィーナはトラバントという未だ十五歳の少女。

「∴魔力無しなら負けねえよ」

「そりゃソフィちゃんはラムザと違って粗野に生きてきたわけじゃないからね」

トラバント家始まって以来の天才を何かの拍子で失うのはあまりに莫大な損失。

故に箱入り娘よろしく蝶よ花よと育てられたソフィーナは、もちろ

ん喧嘩なんて一度もしたことはない。

「粗野で悪かったな」

「まあ僕は一番近くで見させてもらってたからいいんだけど。それにラムザの側は何かと面白いしね」

「…お前の付き合いの良さも考えものだな」

「ほら、僕って世話を焼くのが趣味みたいなものだから」

「だからお前は彼女の一人も出来ないんだよ」

「僕はラムザと違って“出来ない”んじゃないくて“作らない”だけだよ」

カイルが余裕の笑みを浮かべる。

それもそのはず、百人の女がカイルとすれ違えば九十人は振り返る。それぐらいの男前なのだ、カイルⅡバルカスという男は。

いつの間やらクラナガンを中心にしてミッドチルダに広がった“バレンタインデー”という摩訶不思議な文化。

二月十四日に女が好きな男にチョコレートを送るらしいが、当日には必ず山が一つ出来る。

比喩なしにチョコレートの山を作るカイルだが、実は男子から嫉妬の視線を受けることはない。

圧倒的なイケメンを前にすると不満すら出ない。まるでそれが当たり前であるかのように受け入れる。

客観的にモテることが証明できる男は厄介だ。

「お前、さっさと身を固めたらどうだ？」

お代わり自由のホットコーヒー（ブラック）を飲みながらラムザが問う。

二人の年齢は既に二十三才。

平均就業年齢が低く、才能があれば一桁の年齢から働くことが可能な時空管理局の中では、二人の年齢ならば結婚していてもおかしくはない。

事実として、二人の同期や後輩には既に結婚して子どもがいる者も存在する。

「それなら僕は遠慮なくソフィちゃんを貰うよ“義兄さん”？」

対するカイルも負けてはいない。

毎回の話題が振られる度にカイルが返すのは同じ言葉。

そしてそれが本心であるからこそ更に質が悪い。

「はは、ラムザも相変わらず過保護だねえ」

「…お前だけには絶対にソフィは嫁にやらん」

「酷いなあ。それが唯一の親友にかける言葉かい？」

「お前は信頼出来ても、その他大勢の嫉妬で殺されかねん」

ラムザの兄としての心配は尽きない。

特に妹の将来を考えれば悩みの種が次から次へと生まれていく。差し当たってまずは先程の書類が筆頭になる。

「とにかく、だ。コイツは明日にでもソフィに渡さなきゃならん」

ぴらぴらの、吹けば飛ぶような一枚の書類が一人の人間の人生を変えるなんて馬鹿げた話。

本来なら人間の価値はそんな紙で左右されるほど軽いものではない。それでも権力が形を成した書類というものは時として左右するどころか人生を決定する。

「まだ内々の書類だが、まあその内ちゃんとした辞令が下るだろう」

「OK。じゃあ僕はちよつと情報を仕入れてみるよ」

「頼む」

「ま、個人的に興味もあるしね」

奇々怪々。

二人がこれほどまでに疑いの視線を向けるのには明確な理由がある。ラムザの持つ書類の最下段。

そこに書かれてあった名前にこそが原因。

本局特別捜査官、八神はやて

航空武装隊、高町なのは

本局執務官、フェイトⅡTⅡハラオウン

いずれ劣らぬビッグネーム。

時空管理局に所属する人間ならば知らない者はいないほどの存在。

次世代を担う若きエースたちの中でも代表的な三人。

陸、空、海と所属こそ離れてしまっているが、故郷が同じ三人はいまだに付き合いが続いている。

閑話休題。

とにかく問題なのは三人の名前が並記してあるということにある。

「これだけの名前が一枚の書類に並んでるなんて普通はあり得ないからねえ——所属的にも魔導師ランク的にも」

「だからこそ気になる、か」

「ソフィちゃんほどの才能もなく、ラムザほどの戦闘能力もない僕にとって、情報は唯一無二の武器だからね」

気になることは徹底的に調べる。

人間は他の動物に比べて単純な腕力や脚力に劣るが故に頭脳を使う。それは自然の摂理であり、本来ならば淘汰されるはずであった人類が種として生き残るために編み出した新たな力。

現在の高度にハイテク化した電腦社会では情報の占める割合が大きくなった。

情報の取捨選択を決めるリテラシー能力が、かつての単純な力の地位を乗っ取ってしまった。

その主な理由の一つがボタン一つで世界を壊せる力を持つ人間が現れてしまったことにある。

「期待しててよ。数日中には僕がある程度の情報を揃えてみせるからさ」

「おう」

二人が食後のコーヒーと洒落込んだところで丁度タイミングよく昼休み終了のチャイムが響いてきた。

「さてと、それじゃあ午後もしっかりとお給料分だけは働きますか」

「そしてお前は勤務時間キツカリに仕事を上げるわけだ」

「当然。僕と時空管理局の契約内容は八時間勤務だからね。それ以上で働いてやる必要なんてないよ」

「…しっかりしてやる」

大仰に肩を竦めるラムザと薄く笑ったカイルがお互いに顔を見合わせる。

そして、二人は表情を緩めた。

「「人生は楽しくなければ意味がない」」

二人は食器を乗せたお盆を片手に席を立った。

『ラムザⅡトラバント二等陸尉、及びカイルⅡバルカス三等陸尉は今すぐ運用部、レティⅡロウラン執務室まで来るように』

誰も逃れない唯一絶対の法則。
神の紡ぎし運命の網に囚われていることを未だ二人は知らない。

プロローグ（2）

ラムザとカイルが上司から呼び出されることは特に珍しいことではない。

かつてのヤンチャだった時分とは異なり、精神的に成長している二人はあまり問題というものを起こすことなく管理局で働いていた。真面目に働いているにも関わらず上司から呼び出される理由は至極明快。

上司であるレディⅡロウランの気さくな性格と、単なる暇潰しのためだ。

「ようこそいらっしやい、二人とも」

「失礼します」

直属の上司が相手を包み込むような綺麗な笑みを見せる。

美女が嫌いな男はいない。それは二人も同じだ。

しかし、殊この上司に限っては妙なトゲがあるために二人は苦手にしていた。

「昼食中に悪かったわね」

「いえ、丁度昼からの仕事に移ろうとしていたので問題ありません」

「勤務時間内だったので無問題です」

レティに勧めに従い二人は応接用のソファに座る。

「今コーヒー出すわね」

「あ、それなら自分が」

「呼び出したのは私よ、いいから貴方たちは座ってなさい」

カイルの行動を片手で制してレティが簡易用コーヒーをコップに注ぐ。

三人分のコーヒーを持つと、レティは並んで座る二人の対面へと腰を下ろした。

「どうぞ」

「いただきます」

二人は異口同音にそう言うと、礼儀として一度だけコップに口をつけ、コーヒーを少し口に含んだ。

「それで、僕たちに話とは何でしょう」

真っ直ぐにレティの瞳を見ながらカイルが切り出す。

「あら、用がなければ呼んではいけないのかしら？」

「そうですね、勤務時間中は困ります。働かずに税金から給金をいただくのは僕の信条に反しますから」

美人上司からの誘い文句を一刀の下に切り捨て、カイルは数多の女を魅了してきた笑みを浮かべる。

価値観の違いだろう。

俺ならもちろん誘われる、と頭の中で考えながらラムザは二人のや

り取りを見守っていた。

「相変わらず君は“つれない”わねえ」

面白くないわ、とレティ。

「ははは、ご冗談。僕はある意味においては永遠の間男ですよ」

確かに“つれません”しね、とカイル。

お互いに笑顔で優雅なティータイムを楽しんでいる図のように見えるが、しかしその実は言葉の応酬。

冗談が好きなお茶目上司と部下からの人気の高いレティ。

だがカイルにだけは何故か警戒されていた。

その理由は自他共に親友と認めるラムザも知らない。

「それで、出来れば話を進めただけると嬉しいんですが？」

「…分かったわよ」

少し拗ねた様子でレティが返す。

この辺りの可愛い仕草が平然と素で出来るのがレティが部下からの人気を勝ち得ている要因の一つ。

もちろん単純に容姿がいいということもあるが。

コホン、とレティが場の空気を改めるために一度だけ咳払いをする。

「貴方たち二人を呼んだのは一つお願いがあったからなの」

「お願い？」

「ええ。私の友人の下へ出向してほしいのよ」

出向。

つまり現在二人の働いている部署から他の部署への異動。

上司からの命令ならば二人に否——拒否権はない。

それは自由意思による拒否権を行使しないという意味ではなく、拒否権そのものが存在しないという意味だ。

それは『時空管理局職員法』に起因する。

すなわち『時空管理局に属するすべての職員は、上司の指示には必ず従わなければならない』という条文だ。

それは時空管理局に入局するに当たり、すべての入局希望者が覚える条文である。

「“お願い”ということは僕たちに“拒否権”が存在するわけですね」

「そうね。このお願いは私の個人的な理由だから命令としての辞令を出すことは出来ないわね」

問うカイルに答えるレティ。

命令でない以上、レティが二人を説き伏せるための武器は誠意と人情しかなかった。

その第一歩が本心の吐露。

「一応話だけは聞きましょう。まあ受けるかどうかは分かんないですが」

「ありがとう、ラムザくん。私も正直者は好きよ」

再度コーヒーを一口飲み、レティは話を続ける。

「実はね、私の友人というのは本局総務統括官のリンディⅡハラオウンなのよ」

「総務統括官？」

「つか、ハラオウンって…」

二人が反応したのは一つの文章の別の場所。

カイルは管理局の中では五本の指に入るその階級に、ラムザはさっきまで話していた“彼女”に関わるその名前に思わず呟く。

「これはまだ内密な話なんだけど、時空管理局はもう一二年で機動部隊を一つ増やす予定なのよ」

「……」

声を落として話すレティの内容に、黙った二人の頭ではまったく同じ文言が浮かぶ。

『時空管理局古代遺物管理部機動隊第六課』

あの手紙に書いてあった若きエリートたちの集まる夢の部隊。

ラムザの妹であるソフィーナが勧誘された部隊。

そして、現在二人が頭を悩ませている部隊。

「その部隊を率いるのがあの英雄リンディⅡハラオウン元提督だど？」

衝撃的な展開にカイルの目が光る。

リンディ「ハラオウンといえば、かつて数え切れないほどの管理局員を殺害した『闇の書』を倒した“生きた英雄”

夫が『闇の書事件』の際に死んだことから、見事にその敵を討った手腕と悲劇のヒロイン振りが、一時期CMでよく管理局入局希望者を募るための広告塔となっていた。

「違うわよ。リンディももう提督からは身を退いているし、後継にはきちんとクロノがいるもの」

「…では、僕たちは一体何のためにハラオウン総務統括官の下へ？」

「あの子を補佐する、という点では貴方たちの考えは正しいわ。リンディは率いるのではなくバックにつくのよ」

「…要するに、部隊設立までは僕たちに機動六課のために走り回るハラオウン総務統括官の手足になれと？」

「そういうこと。流石、話が早いと楽でいいわねえ」

残念ながら、今の二人の心はレティほどに晴れてはいない。

——新部隊設立。

それに伴って配されるデスクワークの量はあまりにも膨大。

まず間違いなく数日単位で徹夜が続くだろう。

実際問題、この部隊の面子を見れば武闘派の管理局員は喜び勇んで入りたいがるのは間違いない。

しかしデスクワークを主とする者たち、制服組は間違いなく拒否す

るはずだ。

美女揃いになるだろう機動六課への出向と、部隊設立十新部隊運営の苦勞を比較すれば、後者を取る者が多数を占めることになる。部隊を一つ作るとはそれぐらい大変な作業なのだ。

よって、二人の意志も決まっている。

「レティ||ロウラン提督」

「…改まってどうしたの？」

「そのお話、是非ともお受け致します」

レティに向かってラムザが頭を下げる。

「右に同じく。僕も喜んでハラオウン総務統括官の下へ行かせて頂きます」

ラムザに倣ってカイルも頭を下げる。

一般的な常識では拒否権発動だというのは二人もよく分かっている。酷く疲れる、そしてツライ職場になるのは疑問を抱きようがない真実。

しかしそれでも二人はレティの話を快諾する。

「…私から持ち掛けておいてこんなことを言うのもなんだけど、本当によいのね？」

「「はい」」

「…そう」

レティの予想に反し、むしろ意気込んですら見える二人。デスクワークのスペシャリストとしてレティは首を捻る。

「理由を聞いてもいいかしら？」

言外に、わざわざ苦労しに行かなくてもいいんじゃない、と伝える。皮肉なことに、勧誘したレティが二人を心配する図になっていた。

「理由？そんなことは決まってる」

二人が顔を見合せ意志を確認する。

「心配事は少ない方がいいからだ」

「間男を卒業するために」

二人の言葉は更にレティを混乱させるだけだった。



後日。

時空管理局人事部によって一枚の書類がある人間へと手渡された。その書類に書いてあるのは二人の人物、即ちラムザートラバントと

カイルⅡバルカスのプロフィール。

簡潔な二人の経歴、家族構成、魔導師ランク及び魔力ランクなどが書かれていた。

書類を受け取った人間の視線が徐々に下へ下へと向かう。

そしてその視線が“備考欄”へ向かった時、初めて視線が止まった。

「…これは」

（備考）

・カイルⅡバルカスには二度にわたる逮捕歴あり。

・罪状は恐喝、そして————殺人。

手回し

そこは薄暗い路地から始まる町だった。

日の当たる表通りとは違い、ほとんど全てが日陰で覆われているような裏通り。

ミッドチルダのゼロナンバー。

存在しない町。消された町。忘れられた町。

街灯一つありはしない闇の一角。

何かしらの“事情”を抱えているため、表で生きられなくなったロクデナシたちの住処。

普通に生きるならまず関わり合いのない場所。

そんな町の入り口を、カイルⅡバルカスは一人歩いていた。

本来ならば、管理局員であるカイルがここに足を踏み入れることは許されない。

何故ならこの町はミッドチルダにおける零番地。データベースにすら記載されていない吹き溜まり。罪を重ねた者たちが最後に辿り着く生きた墓場であるからだ。

「よう、カイルう！久しぶりじゃん！！」

路地を歩くカイルの上から元気な声と共に大きな影が降ってきた。

「おっと、…アンリ、君ももう子どもじゃないんだからいい加減こういう事は止めなさい」

ため息一つ。

背中に飛び乗った影の主に対してボヤキながらもカイルは歩みを止めない。

「なあなあ！今日は何しに来たんだ！カイルうが『ホーム』に来るなんて一年ぶりだろ！？」

「今日はクレイルに会いに来たんだよ」

振り向きもせず、カイルは少し歩みを遅らせて進む。

「ええーっ！？なんでだよっ、カイルう！？あんな奴放っておいて俺と遊ぼうよ！！」

「だから止めなさい。いい年になった女の子がはしたない」

「お、なになに、カイルうは俺の身体が好みなのか？」

短パンに大きめのシャツだけという十五歳の少女としては少々ラフ過ぎる軽装をしたアンリは、カイルの背中へと胸を押し付けながらにやにや笑った。

ちなみに、アンリのサイズはCとなっている。もちろん何のサイズかは想像に任せるが。

「怒るよ、アンリ。もっと自分を大切にしなさい」

「あははっ、何言ってるんだよ。俺はもうとっくに処女じゃないんだぜ？今さらこれぐらいまったく気になるレベルじゃないって」

「……」

笑いながらアンリはカイルの背中を叩く。

しかし対するカイルは黙ってしまう。

悲しい現実だか、この町では幼くして処女を散らす少女は少ない。

経済的な困窮、強姦、あるいは趣味でそうしている者もいるが、九割九部九厘の少女たちは卑劣な強姦によって無理やり犯される。

そんな世界の中、処女を金として換金したアンリはまだ選択肢があった分だけ幸せと言える。

「クレイルなんかより、俺が奢るからビルのところで一緒にお酒飲もう！」

「…アンリ、邪魔するなら落とすよ？」

脇腹の横辺りから伸びている足を上から押さえつけ、敢えて下に落とそうと試みる。

「わ、わ、わ！？お、落ちるっ、落ちるって！？」

「ぐー、とね」

「お、俺が悪かったよ！大人しくしてるから落とさないで！！？」

「はいはい」

よいしょ、とカイルはバランスを崩したアンリを背負い直す。

事務担当のカイルは一般的な男性職員と比較しても体の線は細い。だがそんなカイルでも十分背負えるほどにアンリは軽い。

そもそもこの町で一般的な人間と同じ健康体の人間は存在しないという前提はある。

しかしそれにしても軽い。

「アンリ。最近はちゃんと食べてる？」

「食べてる！昨日なんかお肉食べたし！」

「…ゴミ箱から拾ったやつ？」

「“オジサン”が奢ってくれた！！」

金を得るために体を売る。

当然ながらミッドチルダで許されている行為には該当しない。
逆にその行為は法に触れる。

——ミッドチルダなら。

忘れてはならないのが、この場所はミッドチルダのゼロナンバーだ
という事実。

ここではミッドチルダの法律は適応されない。

それどころか縛るべき法律が存在しない。即ち無法地帯。

「…ほどほどにしときなよ、なんなら僕のところ泊まりに来れば
いいんだから」

だからカイルも止めはしない。その行為が他でもなく“生きるため”
だと分かっているから。

「やーだ。カイルうのところにだけは泊まんない」

「…いつもそう言ってアンリは断るけど、どうして？」

「だってカイルうのところに泊まったら、私が“我慢”出来なくな

「っちゃうじゃん♪」

愛おしく、恋人を抱くように力一杯アンリはカイルの頭を後ろから抱き締める。

「そんな事アンリが気にしなくてもいいよ。我慢する必要もない。それでアンリが落ち着くなら僕は構わないよ」

アンリの行動を咎めることもせずにカイルは優しく告げる。

「ダメダメ、だってカイルうは特別だもん！俺はカイルうとだけはやらないって決めてんの！！」

「…あっそ」

“体を売る＝金を稼ぐ”という商業的な図式がアンリの中では既に完成していた。

特別だからこそ体を重ねるようなことはしない。

カイルとの間には金という一線を設けたくはない。

それがアンリの偽らざる想いだった。

「その代わりクレイルの用事が終わったら、俺と遊ぼう！！」

「はいはい、分かったよ」

父親にじゃれつく娘のような様相で二人は町を奥へと進んでいく。そしてそのまま喋りながら歩くこと約五分。

二人の目の前に一件の寂れた建物が姿を現した。

三階建てのビル。しかし一フロアの大きさは大したものではない。

一番下には喫茶店、二階と三階は個人事務所となっている。

二階の窓に貼られた文字は『愛Loveジャスティス』
趣味が悪いと思えない。

「前よりも酷くなってない、ここ？」

「クレイルの趣味なんか俺が分かってんの？」

「…それもそうか」

納得したカイルは一階にある喫茶店の扉を開いた。

中は空洞。既に使用されてはいない。

次に脇にある階段を登って二階へ。

中はガランドウ。既に使用されてはいない。

最後に“非常階段”を使って三階へ。

蛍光灯の明かりが眩しく輝いていた。

「クレイル、いるかい？」

綺麗とは言い難い部屋の中はまるで迷路。

足の踏み場もないほどに散らかった本を退かしながらカイルは奥へ進む。

問い掛けた返答を得る前に、未だにアンリを背負ったままのカイルは唯一清潔さを保っているソファで寝ている男を見つけた。

「…まったくこいつは」

事前の連絡などまったく意味がない。

そんなものはなかったとばかりに寝ている男——クレイルは起きる気配すらみせない。

「…アンリ」

「任せろい！」

カイルはクレイルに背を向ける。

そうなれば当然カイルの背に乗るアンリはクレイルの前に来る。

1、2の、3！

なんていう掛け声と共にアンリは遂にカイルの背中から飛び降りた。

「ぐはあっ！？」

飛び降りた先はクレイルの腹の上。

丁度腹を両足で跨ぐようにして乗っている。

苦しそうに呻き声を挙げたクレイルは、目に涙を蓄えながら犯人を見上げた。

「き、キサマあ…」

「わざわざ起こしてやったんだから感謝しろよ」

「できるかあーっ！！？」

「きゃあっ！？」

思いきり体を起こした反動で、アンリがクレイルの腹の上から落ちこちる。

しかし腹の上からは落ちても床に体をぶつけることはない。

転がったアンリの体は、差し出されたカイルの手によって背中から支えられていた。

「大丈夫？」

「大丈夫大丈夫！サンキュー、カイルう！」

アンリは笑いながら自分の足で立つ。

この町で育つ者にほぼ統一して共通するのは“学がない”ということだ。つまり精神年齢が低いのである。

普通の十五歳ならば呆れてしまうことでも楽しそうに笑う。

それは正に幼い子どもと感性が同じということ。

これもまた悲しい現実の結果だ。

「…カイルだあ？」

腹の底から響く声。

クレイルがカイルの目の前で立ち上がり、真っ正面からその黒い瞳を見つめた。

「…確かにこの小憎たらしい目はカイルⅡバルカスだ」

「…君が僕をどういう目で見ていたのかがよくわかったよ」

額に手を当て、カイルが大きくため息をはく。

クレイルとカイルの付き合いは約十八年。ラムザとの付き合いよりも長い。

カイルにとってクレイルは生まれて初めて出来た友人であり、また同時に、生まれて初めて喧嘩した相手でもある。

本音も建前も言い尽くした間柄。

カイルが管理局で働く切っ掛けを作ったのもクレイルであった。

「それで？今日は何をしに来たんだ？」

まだ眠たいのか、クレイルは大きな欠伸をしながら頭を搔く。

「面倒なことなら俺は御免被るからな」

胸ポケットに入れた煙草に火を着け、寝起きの一服。

煙を肺に大きく吸い込み、一気に吐き出す。

そのあまりに心地よい一時に酔いしれる。

「それは困るな。なにせ僕が頼もうとしていたのは比喻なしで面倒なことだからね」

「なら却下だ。却下。なんでわざわざこの俺様がんなことに関わらなきゃなんねえんだよ」

しっしっ、と犬でも追い返すかのようにクレイルが手を振る。

「そこをなんとか頼むよ」

「ダメだ」

「お願い！」

「無理」

「本当に君の手が必要なんだ」

「No」

手を合わせて頭を下げるカイルだったが、クレイルの返答はどうも芳しくはない。

そのクレイルの無下な態度は、次第にカイルではなくアンリの機嫌を悪化させていた。

「クレイル！カイルうがこんだけお願いしてるんだから受けてやれよ！！」

「お断りだ。久しぶりに帰ってきたと思ったら手を貸せだあ？んなもん却下だ！！」

「ケチ！減るものじゃないだろ！！」

「減るわ！主に限りある時間と労力的な意味で！！」

「難しいこと言うな！カイルうが頼んでるんだからクレイルは受ければいいんだよ！！」

「うっせ！お前は関係ないんだから黙ってろ！！」

「な、なにーっ！？」

ヒートアップする二人はもはや掴みかからんばかりに顔を突き合わせる。

元々そんなに仲が良くない二人だ。意見が反目することなんてよくあること。

それでもその原因が自分となるとカイルも居たたまれない。

「止めなさい、二人とも」

両者の間に体を割り込ませてカイルが二人を引き離す。

二人が喧嘩をすると、どちらかが殴り倒されるまでは終わらない。唯一それ以外に終わりがあるとすれば、それは誰か第三者が間に入ることにしかない。

「受けるよ！バカ野郎！！」

「うるせえ！チビガキ！！」

カイルの手に遮られながらも尚口論を止めない二人。

自身の手から身を乗り出して相手に迫ろうとする二人に、流石に温厚なカイルも手を出した。

拳を握り、思いきり高く振り上げる。

そして二人の頭頂へと降り下ろした。

「ぐおおおっ！？」

「いったああああい！？」

頭を押さえて踞る二人。溢れんばかりの涙を溜めて恨みがましい視線をカイルに向ける。

「…三度は言わないよ。二人とも、いい加減に止めなさい」

笑顔で告げたカイル。

しかしカイルの表情に反して振り返った二人は人形のようにカクカクと首を縦に振るのだった。

——何故かお互いに身を寄せ合うように抱き合った体勢で。

「わ、分かった、お前の話は分かった」

「…怖いよう、カイルう」

冷や汗を流しているクレイルと半泣きのアンリ。

「……」

そして黙したカイル。

そんな中、話を切り出したのは意外にもクレイルだった。

「と、とにかく話だけは聞いてやろう」

「お願いするよ」

クレイルは激しくなった動悸を抑えながら、邪魔な本を椅子から退けてカイルとアンリを招く。

弱々しく袖を握るアンリにジュースを入れると、クレイルはカイルと向き合った。

飲み会

「ようオッサン、まだ生きてたようで安心したぜ」

「ったく、久しぶりに誘ってきたと思ったら早々にそれかよ」

クラナガンではもはや数えるほどしか残っていない前時代的な建築物——木造建築。

その内の一つであるとする居酒屋の暖簾を潜ったラムザは、カウンターに座る一人の男へ手を上げた。

「『知らせがないのはいいい知らせ』だろ？」

「調子の良さは相変わらずじゃねーか、ええ、おい」

店主に男と同じく『日本酒』と呼ばれる管理外世界の酒を注文し、ラムザは男の隣のカウンターへ座る。

「嬢ちゃんは元気か？」

「元気も元気。そもそもソフィの奴が風邪でもひこうものなら親父が直ぐに医者を呼ぶだろうからな」

「…あの親バカ野郎も懲りねーなあ」

ククク、と男は昔を思い出しながら笑う。男とラムザの父親は時空管理局の訓練学校を同期として入学、卒業したという経歴を持つ。ラムザやソフィーナが生まれる以前の親友同士の間柄だった。

「そっちこそどうなんだよ」

「あん？」

「引き取った娘だよ、娘。ほらなんてったか、女の子が二人、あー
…と」

「ギンガとスバルか？」

「そう、それだ」

空いたお猪口に酒を注ぎながらラムザが男を指差す。

「ギンガとスバルは元気か？」

実際に会ったことがないものの、ラムザは電子ウィンドウを通して男から二人の話は聞いていた。いつも楽しそうに話す男だが、何故か今はため息と共に俯くのだった。

「…なあラムザ」

「な、なんだよ」

「…どうして娘ってもんはあんなにも可愛いんだろうなあ」

「……」

いい年したおっさんが幸せそうに呟く、なんていう気持ち悪い現象を前に思わずラムザの口から言葉が失われる。

「ギンガの奴がよお 『お父さん、いつもお疲れ様』 って肩を揉んでくれんだよお」

「…へー」

「スバルの奴もよお 『お父さん、頑張れ！』 って言ってくれてよお」

「…へー」

「本当にいい娘たちに育ってくれたよなあ」

「…へー」

ラムザは興味なさげに酒を飲みながら肴として注文した枝豆を食べる。

もはや何度聞いたのかも分からないような話は既に耳にタコ。

現在の状態を聞いたかったのであって親バカ話はどうでもいい。

ラムザにとって親バカな話をするのは実の父親だけで十分なのだ。

「まあ元気そうならよかったじゃないか」

だからこそ出てしまった安易な一言。

ラムザのこの言葉を皮切りに男の態度が一変する。

「良くねえー!!」

「~~~~っ!?!」

急に耳元へ近付いたかと思ったら、次の瞬間には大声で怒鳴る。
あまり飲んではないはずなのに、既に男のそれは絡み上戸と同じ

様だ。

「っんだよ、次は!!」

苛立ちを込めてラムザが言う。

しかし拳を震わせながら酒を呷る男には聞こえていない。

男はラムザの肩に手を回し、更に言葉を重ねていく。

「アイツら、今じゃもう二人とも管理局員だぞ!? こんな危険な職になんぞ着くからもう俺あ、心配で心配で…」

「…だあもう! いい年したオッサンが引っ付くな鬱陶しい!!」

ラムザは男を引き離そうと試みるものの、絡み付く男は人の話を聞きもしない。

「管理局なんて何時命の危険があるとも知れねえ職場に可愛い娘を二人も預けるなんぞ…っ、…くうっ!?!」

「泣きながら酒飲むなよ!?!」

「うっせえ! これが飲まずにいられるかあっ!?!?!」

「あー、はいはい」

「おらっ、お前さんも飲め!」

「うおっと!?! 分かった! 分かったから、そんな震えた手で酒を注ぐな!?!」

激情と酒の影響で震える手。

揺れる徳利を男の手から奪い取り、ラムザは自分のお猪口に酒を注ぐ。

「今日、俺が来たのはオッサンの愚痴を聞きに来たわけじゃないんだけどなあ…」

くだを巻く男を横目に見てラムザはため息をはく。

しかし中間管理職としてストレスの溜まる仕事をこなしている男の口から出るのが仕事の文句ではなく家族の心配だということに安堵感は覚える。

ギンガとスバル。

二つの宝物を大切そうに守ってきた男の本心からの吐露。

「ラムザあゝ」

「へいへい、分かったから取り敢えず飲めよ」

「おお、気が利くじゃねえか」

どんな生き物でも子どもに命を与えた父親は当然一人しかいない。父親と母親はそれだけで子どもにとっては特別な存在となる。

だが、人間とは社会的にしか生きられない存在である。

最も根本的な社会である家族からより大きな枠組みへとコミュニティを広げるにあたり、人間は先達から生きる術を学ぶ。

それは一人であったり複数であったりする。

ラムザにとって、初めて“マトモな社会”でその術を教えてもらったのがこの男——ゲンヤリナカジマ。二人目の父親、社会的な父親であった。

「そういやあお前さん、なんか俺に用があつたんじゃねえのかあ？」
あんまり強くないくせに酒は好き、という厄介な趣向を持つゲンヤの顔は既にかなり赤い。

それでもまだ記憶に残る情報を引き出せるぐらいには理性があるらしい。

「もうそのことはいいって。今日は付き合ってやるからトコトン飲もうじゃねえか」

「お、そうか？ じゃあお前さんも飲め飲め！」

「はいはい」

こうしてゲンヤの娘への愚痴と自慢を肴に二人で酒を飲む間にも夜は更けていく。

ゲンヤに勧められるがままに飲むのは酒が大好きで、かつ、酒に強い男。

お互いに酒が好きだがその強さは段違い。

そんな二人が飲みあえば、結果は自ずとみえてくる。

――二時間後。

「オッサン、オッサン！」

ラムザが隣でカウンターに突っ伏しているゲンヤの肩を揺する。

「んゝゝ、ギンガァゝゝ、スバルウゝゝ」

しかし酒瓶を片手に抱く酔っ払いはまるで起きる気配がない。
心地よさそうに幸せな表情で娘たちの名前を寝言で呟く。

きっと夢の中では二人の娘と何か微笑ましいことでもしているのだろう。

「悪いな、店主。迷惑かけちまってるな」

目の前で皿を洗う店主に謝罪をしつつ、いつまで経っても起きそうにないゲンヤを肩に担ぐ。

「代金はそこに置いとくからな」

二人分の代金をカウンターに乗せ、ラムザはゲンヤと共に居酒屋を出る。

二人がいた居酒屋は大通りから一本脇に逸れた路地にあつた。

ふらつくゲンヤを支えながら大通りへ戻ると、そこは街灯に照らされた空間。

昼を彷彿させる眩しい光が二人に降り注ぐ。

「だぁーっ、いい加減起きろよ、オッサン！」

「くはははは！」

怒鳴りながらもラムザはゲンヤを肩に担ぎ直す。

街灯の明かりに周囲を照らされながら、二人は大通りをゲンヤの家に向かって歩き出す。

「まったく、アンタと飲むと絶対に最後はこうなるんだよねあ…」

そしてこのままラムザの家に泊まらせると、次の日には必ず少し落ち込んだ様子のゲンヤが管理局に現れる。

それがいつもの二人のノリ。毎回恒例の行事。

しかし、今日に限ってはそんな普段の展開になることはなかった。

「お、お父さん!?!」

背後から挙げられた少女が驚く声。

ラムザは糸で引かれたように背後を振り返った。

するとそこには一人の少女が立ち尽くしていた。

腰まで届く淡い紫色をした繊細そうな髪。

大きな瞳と桃色の唇は少女に愛らしさを与え、年齢相応に施された最小限の化粧が更に少女の端正な顔を強調している。

同年代の少女たちに比べれば些か高い身長は、あと数年もすれば少女を女性へと変えるだろう。

「だ、大丈夫、お父さん!?!」

慌てた様子でゲンヤへ駆け寄る少女は、肩に担いでいるラムザとは逆側からゲンヤの顔を覗きこむ。

「お父さん! お父さん!」

「んー…、…おー! ギンガじゃねえか!」

「『ギンガじゃねえか』じゃないわよ、もう」

少女は腰に手を当ててため息をこぼす。

「…ギンガ？」

二人のやり取りに困惑したのはラムザだ。

少女を視界に入れたゲンヤの口から飛び出したのは『ギンガ』という名称。

それは今日も散々聞かされた二人いるゲンヤの娘の名前。

つまりそこから導き出されるのは少女がゲンヤの娘であるという事実。

「なるほど、アンタがオッサンの娘の『ギンガ』か」

「…あ、はい。…あの、ところで貴方は…？」

下から見上げる形でギンガがラムザを見る。

美少女、と前置きしても誰も文句など言わないだろうギンガの上目遣いはそれだけで男を落とすには十分な威力。

しかし残念ながらそれは同年代の男が相手ならばの話。

ラムザを落とすには十ばかり年齢が足りなかった。

「俺はラムザⅡトラパント。オッサンの古い友人だ」

ラムザが名乗るとギンガは目を見開いて驚いた。

「貴方が“あの”ラムザさんだったんですか!？」

「“どの”ラムザさんかは知らないが、親友の息子のラムザⅡトラパントなら俺だろうな」

あるいは世話の掛かるラムザⅡトラバントかもしれないがな、とラムザは愉快に笑う。

「お話は常々父から聞いています！」

「：どんな話をしているのかが非常に気になるところだが、敢えて聞くのはよそう」

どうせ碌なことではない。

赤ん坊の頃から自分を知る大人ほど厄介な存在はいない。

「あ、私、代わりに支えます」

「いいよ、別に。酔ったオッサンを連れて帰るのは昔から俺の役目だからな」

ラムザが酒を飲み始めたのが八歳の頃。父親に勧められて飲んだのが切っ掛けだった。

以来、ラムザは父親とゲンヤの酒の席に混じって何度か一緒に酒を飲んだ。

そして次第にラムザが大きくなり、ゲンヤと共に外で飲むことが増えると、いつの間にか先に酔い潰れるのがラムザからゲンヤに代わっていた。

それからずっとラムザは酔い潰れたゲンヤを送っていた。肩にゲンヤの重さを感じながら。

「それよりいいのか？あの娘たち、お前の友達だろ？」

ギンガが近寄ってくる前にいた場所にラムザが顔を向けると、そこにはギンガと同じ年齢程度の二人の少女が立っていた。

「二人とも困ってんぞ」

「あ、う、その…、…ちよ、ちよっと待ってて下さい！」

「お、おい！」

ラムザが止める間もなくギンガは友達たちの方へ走っていった。

「…子どもか」

思い立ったらすぐ行動。まるで行動原理が子どものようだ。
大人しくこのまま待つこと約二分。
再びギンガが戻ってきた。

「すみません、お待たせしました！」

行きましょう、とラムザとは逆側の脇から肩を入れてギンガがゲンヤを支える。

「だから別にいいって」

「いえ、やっぱり私もお父さんを支えてあげたいんです」

「…友達はいいのか？」

「はい。事情を話して今日は解散にして頂きました」

「…そうか」

娘にそこまで言われれば、所詮他人でしかないラムザには何も言えない。

ラムザは少し力を抜いた。

「っ、…トラバントさん？」

「支えてやりたいならしっかり力を入れろ。お前の親父は意外と重いぞ？」

「…はい！」

一度支える体勢を変えてギンガは足と腰に力を込める。

尊敬する人は父親です、を地でいくギンガにとってゲンヤの身体はまだ一人で支えるには重すぎる。

ちら、とギンガは横を歩くラムザの顔を覗き見る。

「あの…」

「ん？」

「ありがとうございます。それに父のこと、これから仲良くしてあげて下さいね」

笑顔で語るギンガに、ラムザもまた笑みで返す。

そんなこと、改めて言われるまでもないことだ。

ラムザにとってもゲンヤⅡナカジマは代替不可能な存在。

今さらこの長い付き合いがそう簡単に切れるわけがない。

光と可能性に満ちた瞳を輝かせるギンガを相手に、ラムザは再びそっと小さな笑みを浮かべるのであった。

退職願

「失礼します」

ラムザとカイルの二人がとある部屋の前に立つ。

場所は時空管理局本局総務部。

絶大な権限を持つ時空管理局本局の中でも特に多くの権力が集中するのがここ、総務部だ。

周囲からは便利屋などと呼ばれることも多いが、その実は管理局員たちの人事を握っている権力のある部署。

そしてそんな総務部の中でもトップにいるのが現在二人の目の前にある扉の向こう側にいる人物。

『ごめんなさい。今ちょっと手が離せないから入ってきてもらえない？』

部屋の中から聞こえてきたのは若々しい女性の声。

しかし二人は知っている。この明らかに二十代にしか聞こえない声の主が本当は四十代であり、尚且つ既に二十代である一人の子持ちだということを。

「ラムザⅡトラパント二等陸尉であります」

「同じくカイルⅡバルカス二等陸尉です」

入室すると二人は揃って上官に向かって敬礼。

相手は管理局でも五指に入る大物局員。しかも局員の人事権を握っている以上は二人のクビを飛ばすことなんて簡単なこと。

流石に二人も歴然たる権力の差には逆らえない。

礼儀正しくお手本通りの形で美人な上官へ挨拶を行う。

「フフ。よく来てくれたわね、二人とも」

書類から顔を上げ、リンディハラオウンが二人に微笑みかける。
特徴的な翡翠色をした髪に母性溢れる柔和な表情。

とても四十代の未亡人とは思えない美女が責任者の席に座っていた。

「レティから噂は聞いているわ。次世代を担うとても優秀な人材がいるってね」

「ロウラン部長は人をもちあげるのが得意な方ですから」

「まったく何を根も葉もない話を言っているんだろうねえ」

リンディの誉め言葉を謙遜という名の誤魔化しで二人は覆い隠す。
魔導師としての二人は精々二流に過ぎないが、事務員としては優秀だというレティの評価は誤っていない。

むしろ正鵠を得ている。

しかしその事実を知る者は同じ部内、あるいは同じ課内でも意外と少ない。

確かに二人はかなり真面目に仕事はする。だが真面目と本気は違う。
少なくとも二人は本気で働いたことはまだない。

「僕たちが優秀だなんてロウラン部長も冗談が好きだよねえ」

「そうだな。部長の下で働いて数年経つが、俺たちが手柄なんて挙げたことが一度でもあったか？」

「あはは、ないない」

笑う二人だが残念ながらそれもまた事実だった。
レティの下に着任してからの二人は一階級も出世はしていない。

「ハラオウン総務統括官もあまり僕たちを買い被らないようにお願いします」

「右に同じく。ロウラン部長みたいに妙に買い被られると実力以上を求められるので大変やりづらいので」

早速二人は挨拶に要求を混ぜる。

無理と無茶の間には絶対的な越えられない壁がある。

レティの場合、こちらの体調の変化がすべて分かっているのかと疑いたいぐらい無理の一手前まで仕事を振る。

ある意味絶妙な仕事の割り振り。上司としてはキツイが上に立つ者としては、レティは優秀すぎる人材だった。

「貴方たちの希望は分かりました」

まずリンディがそう切り返す。

レティからリンディに与えられた情報は多くない。

だがその数えられる程度の情報をもって、リンディはある程度二人の評価を既に固めていた。

「まずバルカス二等陸尉。貴方には総務部情報局の局長の椅子を用意してあります」

「：ハラオウン総務統括官？」

「そしてトラパント二等陸尉。貴方には私の補佐官としての働きを

期待しています」

「うっわぁー…」

人の話、まったく聞いてねえー…。

二人の心が見事なまでにユニゾンする。

権力の座に興味は引かないし、比例して増加する仕事量にも頭を下げたい。

某国の官僚組織はやりがいのある仕事をするために出来るだけ多くの予算を取ろうと権謀術数を巡らせるらしいが、生憎二人にそんな結構な考えはない。

「えっと、ハラオウン総務統括？」

「これから一緒に働く仲間なんだから『リンディさん』でいいわよ」

「では『ハラオウン総務統括官』にお聞きます」

笑みで自らの呼び名を勧めるリンディに、カイルがより朗らかな笑みで拒否する。

「…なにかしら？」

少し頬を膨らませてリンディが応える。

「ロウラン部長の下で何の実績もない僕たちがいきなり他の部署で厚遇されるのはあまり良くない傾向だと思いますが？」

「私の方針は、優秀な人材は相応しい地位に着けること。」

レティが言ってたわ。貴方たちは与えた仕事“しか”しないけど、与えられた仕事はちゃんとこなすと」

「なるほど、それは合理的だ」

組織の構造上、優秀な人材が上にいくのは自然の摂理。

リンディⅡハラウンの自論は間違えではない。

イタリアの政治家であるマキャベリは君主とは『狐の狡知と獅子の勇猛』を模倣すべしだと語った。つまり人の良さではなく優秀かどうかが上に立つ者の基準となる。

それもまた価値観の一つだということはラムザとカイルも理解している。

「しかし残念ながら人間は欲望からは逃れられない。貴女の人事は私情に左右され過ぎている」

情報局なんて大きな力のある部署の局長になれば当然求められる能力は大きくなるし従う部下の数も多くなる。

そして同じように嫉妬する人間の数も急増する。

カイルにとってそれは是非とも拒否したいこと。これ以上の“弊害”は冗談にならない。

「私の人事が悪いと？」

「長年情報部で働いていた者において僕を局長にする場合、そういう事態になるということですよ」

人間は理性と感情の二つを持って生きている。

頭では上司への服従義務があると分かっているけど、心が納得するかどうかは別問題。

「僕は同じ部内でのゴタゴタに付き合う気はありません。貴女はもう少し周囲の人間の欲望を考えるべきだ」

人間関係のバランスを考えられない人間に組織の人事は務まらない。リンディⅡハラオウンには狐のような狡猾さが足りない。

閉鎖的人間関係を好む清廉潔白な人間ほど組織に悪影響を与える人間はいない。

「貴女はいいかもしれない。親友であるロウラン部長の肝いりで入ってきた僕らを使うのだから一定の信頼はあるんでしょう。」

しかし僕らは違う。

誰も知らない部署で働く以上はそれなりのケアが必要なんですよ」

言いたいことは言い切ったとカイルが口を閉ざす。

情報に強いというカイルの長所は隠れているからこそ長所になる。

人の弱味や隠し事の類は知っていることが相手に知られないからこそ握っていて意味がある。

そのためにはあまり高い地位にいるのは好ましくなかった。

しかも部署が情報部など、自ら情報を握っていると公言しているようなもの。

そんな危険に身を晒すわけにはいかない。

「…そう、カイルくんの考えは分かったわ」

ニッコリ笑顔。リンディはその均整な顔をラムザへ向ける。

「…それじゃあ次はラムザくんの考えを聞かせてもらえるかしら？」

「大体カイルと同じですよ。俺もどうせ働くなら働きやすい環境が

いいですから」

「ラムザはそんなに深く考えないよねえ？」

「お前が考えすぎなんだよ。もういつそハゲちまえ」

このバカ野郎、とラムザがカイルの背中をつねる。

「痛い痛い」

「さて、なんのことだか分からんな」

一応、並んでいる二人の背中正面にいるリンディからは見えない。

「仲がいいのね、二人とも」

「まあ付き合い長いんで」

「意外とね」

喧嘩に明け暮れていたラムザと情報を武器とするカイル。

正反対のことを得意とする二人だが何故かよく気が合う。

だからこそ今までの付き合いがあった。

「なるほど、分かりました」

自分の言葉が拒否されたというのに最高の笑顔をみせて二人を見るリンディ。

うんうん、と二人に向かってリンディは一人で勝手に納得して頷く。二人が不思議そうに顔を見合わせ中、リンディがその笑みのまま

告げる。

「じゃあさっそくで悪いんだけど——管理局を止めてくれないかしら?。」

「::はあ?。」

「::はい?。」

いきなり上司に突き付けられた辞職勧告に、二人の目が点になったのは言うまでもない。

聖王教会

清らかな水の流れと爽やかな木々に囲まれた霊験あらたかな土地――聖王教会。

苦しみを抱えた者には解放を。悲しみに囚われた者には慰みを。敗れし者には一時の安息を。そして訪れた全ての者には慈悲と慈愛の心を以て。

かつて古代ベルカには諸王時代と呼ばれる戦いの歴史があった。

優れた王は領土を拡大し、愚鈍な王は国を失う。そんな壮絶な歴史の中において『ゆりかごの聖王女』と称され、魔導と武術に優れた一人の王女がいた。その名をオリヴィエーゼーゲブレヒト。聖王教会の信仰主として仰がれている人物その人であった。

「儲かってんなあ、聖王教会」

緑溢れる閑静な庭園を前に、時空管理局の制服ではなく簡素な私服に身を包んだラムザⅡトラパントがいた。

「お待ちしております、トラパントさん」

そしてそんなラムザを待ち受けていたのは一人の身目麗しい少女。特徴的な紫色の髪を短く切り揃え、黒地を主とする修道服を身に纏う姿は敬虔なシスター。聖王教会に身を置くシャツハⅡヌエラだった。

「アンタがシスターヌエラか？」

「はい。時空管理局のハラOWN総務統括官から話は承っています」

シャッハは恭しく頭を下げる。

「どうぞご案内します」

「おう、頼む」

その態度はまるで学校のクラス委員長のように明快だ。

レティといいリンディといい一癖も二癖もある女傑を相手にしただけに、シャッハの素直で正直そうな雰囲気は知らずラムザの中で好感度を上げていた。

「シスターヌエラ」

「为什么呢うか？」

庭園の中央にある噴水の側を通りながら二人の会話は続く。

「聖王教会は騎士団を所持していると聞いたんだが？」

「はい。私たちは空戦、陸戦それぞれ適正にあった騎士団を持っていますよ」

聖王教会所属騎士団は騎士長と呼ばれる女性を中心にして、時空管理局と同じように大きく二つに分類される。即ち飛行能力を持つ空戦騎士と突破力に優れる陸戦騎士だ。

両者は互いに競い合いながら腕を磨く。

「実はかくいう私も陸戦騎士として教会騎士団に所属している身なんです」

「へえ——確かによく見れば鍛えている奴の体つきだな」

余程いい鍛え方をしているのか、シャツハの体に無駄な筋肉など一切ない。素早く動いたための引き締まった筋肉と柔軟な関節。戦闘を前提と考えた者の鍛え方に違いなかった。

「シスターヌエラは強いのか？」

「そんなことはありません。私なんてまだまだ修行中の若輩者ですから、弱者として先達から学ぶべきことは多いです」

「弱者、ねえ」

謙遜だということは一目で分かる。恐らく幼い頃から人一倍厳しい鍛練を重ねてこなければこれほどの存在感は出ないだろう。

若い時分、喧嘩や抗争に明け暮れていたラムザだからこそ分かる雰囲気はシャツハにはあった。

「くはは！いいな、シスターヌエラ！アンタのことは気に入った！今から俺のことはラムザと呼んでくれ！」

カイルを筆頭に、ラムザは気に入った人間には自身を名前で呼ばせる癖がある。多少の裏話はあるものの、シャツハの隠し切れないイイ女の気質はラムザの好みに見事に適合していた。

「分かりました」

ラムザを振り返り、シャツハが綺麗な笑みを浮かべながら首を縦に振る。

「では私のことはシャツハとお呼びください」

差し出されたのは白磁のような手。それでもやはり教会所属の騎士として鍛えているのか、指や掌には複数のマメが出来ている。何かに一生懸命になっている人間は、ラムザが最も好むタイプの人間だった。

「私も貴方のことが気に入ったようです」

握り返した手は柔らかく、それでいてラムザが思ったよりも小さかった。



聖王教会という場所には大きく分けて三つの意味が込められている。一つ目が信仰。最後のゆりかごの王と呼ばれたオリヴィエ聖王女を信仰主とする数多の次元世界に影響力を持つ大きな宗教団体としての意味。

二つ目は治安維持。警察権と軍事権を合わせた権力を持つことから、積極的に当該次元世界の公的組織と協力して事件の解決を図る意味。そして三つ目がロストログアへの対応力。本来ならば時空管理局がこなす任務なのだが、管理外世界に対する影響力は聖王教会の方が強い。更に信仰主がオリヴィエ聖王女としていることから古代ベル

カに関連するロストログアに関しては一日の長がある。つまり十分に対応できる力が聖王教会には存在するのである。

よってこれらの観点から、聖王教会には弱者救済としての教会だけではなく、実際に戦う術を持っている組織が組み込まれている。それこそが『聖王教会所属騎士団』と呼ばれる騎士たちである。

「こちらです」

「ああ」

清潔感に溢れた真っ白な壁と手入れの行き届いた床をラムザとシャツハは進む。

先程までの庭園は途中の分かれ道で聖王病院、聖王教会、そして聖王教会所属騎士団本部隊舎へと続いていた。今回二人が進んだのは聖王教会所属騎士団本部隊舎への道。目的の人物はそこで政務に励んでいるからである。

「カリム、シャツハです。ラムザ||トラパントさんをお連れいたしました」

とある一室の前で足を止めたシャツハが二度のノックの後に扉の向こう側にいる人物へと声をかける。

『――』

しかしシャツハに対する返答はない。

「カリム、シャツハです。お開けしても構いませんか？」

『――』

再度扉へ向かって声を掛けるもののやはり返答はない。普段ならば呼べば必ず出てくるカリムの声がしない。シャツハは「失礼します」と一声かけてドアノブを握る。

「カリム？」

だが開いた扉の奥には人の姿どころか気配すらない。唯一執務室机の上にあったのは仕事の書類だけであった。

「どうした？」

シャツハの行動に疑問を持ったラムザが横から顔を出す。

それに対してシャツハはすまなそうに少しだけ顔を歪めた。

「…申し訳ありません。どうやら“また”カリムの病気が出たようです」

「病気？」

「…はい。実は私の仕事はカリムに与える仕事の量を調整することなんです。…あまり忙し過ぎるとカリムは行方不明になってしまうので」

それは『誰にも何も言わず、興味関心の赴くままに行方知れずになる』ことだ。

しかも暫くすると何故か必死に探すシャツハたちに気付かれることなく、満足した顔で何事もなかったかのように帰ってくる。

何か危険なことや法に触れるようなことはしていないという自信と

信頼はあるが、世話役であるシャツハにとっては一大事。火急かつ速やかにカリムを探し出さなければならない。

シャツハは直ぐに教会内にいる他のシスターに向けて念話を飛ばす。

「最近、グロシア少将は忙しかったのか？」

「…はい。機動六課関連で少々多忙な日々が続いていたので、そのストレスが溜まっていたのだと思います」

カリムに過度のストレスは厳禁だ。放っておけば何処までも仕事をこなすのに、いざ爆発する時は誰にも告げない。難しい舵取り。傾きすぎないようにバランスをとることが秘書官としてのシャツハに課せられた使命でもあった。

「…要するに何処に行ったのか分からないんだよね？」

「…はい」

「なるほどな」

カリムの執務机の上に置いてある書類は既に全てサインが書いてある。つまり仕事は終えているから実害はない。

「申し訳ありませんが私は今からカリムを探しに行きますので、ラムザさんは少々ここでお待ちください」

後で誰かに紅茶を持って来させます、とシャツハ。

「や、それはいい。それより俺も探すのを手伝おう」

なに、俺もただ待つだけってのは暇だからな、とラムザ。

「そんなっ!？こちらから招待させていただいた客人にそのようなことはさせられません!？」

「まあそう言うなよ。どうせ午後には同僚になるんだし、ちよつとそれが早まったただけだろ?」

「し、しかしっ!？」

「はいはい。んじゃ俺はあっちを探しに行くから、そっちは任せたからな」

「あ、ちよつ、ちよつと待って下さい!？」

言うだけ言って早速去ろうとするラムザに手を伸ばしてみるが、しかしシャツハの手はラムザの背に触れることなく虚空を掴む。

面白いことを見付けた時のラムザの行動は驚嘆に値する、とはカイルの談。

すでに見えなくなったラムザの背中に向けて溜め息をついたシャツハは、諦めて“そっち”に走っていった。



聖王教会の領地内にある広大な森の中。一際目立つ湖の畔にカリムⅡ
グラシアはいた。

「…はあ」

流れるような金砂の髪がカリムの溜め息と共に揺れる。

——また、やってしまった。

「…どうしていつもこうなるのかしら？」

白魚を思わせる指で周囲に咲く花を冠へと作り替えながらカリムが呟く。

本当は抜け出すつもりなんてなかった。忙しい仕事もみんなが幸せに近付けると思えば苦に感じたこともなかった。むしろ自分が誰かに必要とされている実感が幸福感すら与えてくれていた。それは分かっていた。いや、今もカリムは分かっている。

しかしそれでも珠には『聖王教会の騎士カリム』でも『時空管理局少将カリムⅡグラシア』でもない『ただのカリムⅡグラシア』としての時間が欲しい。

そう願ってしまうのは果たして人間として誤った願望だろうか。少なくともカリムは働き続ける自分に疑問を持ってしまった。このままでもいいのかという思考の迷路に迷い込んでしまった。そうなるのカリムはいつも思考が纏まらず、かといって止まるわけでもなくひたすらぐちゃぐちゃになってしまう。

「…シャッハ、…困っているかしら？」

あの素直で実直な娘のこと、必ずいきなり姿を消した自分を探して走り回っているだろう。いつもいつもあの娘は私のことを第一に考えてくれる。なんて優しい娘。

疑念と申し訳なさに板挟みにされるカリムの表情には影が落ちる。

「：はあ」

迷惑を掛けていることは十分理解している。カリムとて若いながらも政治に携わる人間。その辺にいる同年代の女性よりは人間の心の機微には悟い。

真剣に考え込むカリムは、それ故に自らの体を穏やかな日光から覆う影に気付かなかった。

「溜め息が多いな、グラシア少将」

「ひゃんっ!？」

不意に耳へ届いた声に、カリムは直ぐ様そのしなやかな肢体を翻す。足元まである黒いロングスカートがカリムの動きに合わせて宙を舞う。

「それともここではグラシア少将ではなく騎士グラシアと呼んだ方がいいのか？」

見下ろす男は顎に手を当てて笑う。そしてその男の様子を見たカリムは何よりもまず慈愛に満ちた笑みを浮かべた。

「いきなりで申し訳ありません。少し驚いたもので」

「構わねえよ。それよりまずは立つところから始めようか」

どこか男には似合わない紳士風の態度。差し出された手を取りカリムはスカートについた花や草を払いながら立ち上がった。

「ご親切にありがとうございます。宜しければ貴方のお名前を伺え

ますか？」

「ラムザⅡトラパント。以後よろしく頼む」

男の名前を聞いたカリムは驚き目を見開いた。

ラムザⅡトラパント。それはカリムの友人の母親にあたる人物から紹介された人間の名前だった。

「も、もうそんな時間でしたか！？ももも、申し訳ありませんっ！
！」

一生懸命。あるいは精一杯頭を下げるカリム。

約束の時間を間違えるなんてミスは普段のカリムなら決して起こさない。シャツハがカリムの悪癖にも口を閉ざしていたのは仕事に支障をきたさないことに原因の一つがある。

だが今回に関しては初めて仕事に支障が出てしまった。
カリムの顔は既に真っ赤になっていた。

「気にするな。俺は謝らない奴は嫌いだ、謝りすぎる奴は好きじゃない」

「は、はい！」

尚も下げようとするカリムの頭をラムザが手で制する。

「落ち着いたらシスターシャツハに連絡を入れてやれ。アイツは今もアンタを探して走り回ってるはずだ」

「…や、やっぱり」

シャツハの話題を出すと途端にカリムの表情は暗くなる。

「やっぱり？」

「…シャツハにまた迷惑を掛けちゃいました」

しゅん、と怒られることが分かっている子どものようにカリムは項垂れる。

「なんだそんなことか。それこそ気にするほどのことじゃないだろ」

「…人に迷惑を掛けることは悪いことです」

「テンプレートだな。人間の中には人の世話をするのが好きな奴だっているだろ」

「…ですけど」

「なに、シャツハはお前のことが好きだから側にいるんだろ？それなら一言誤るだけで十分だ」

だから安心しろ、とラムザはカリムの背を軽く叩く。

「それよりも帰るぞ？俺だって早く休みたいんだ」

「うう、…すみません」

「だから一々謝るな」

「あうっ!？」

デコピン一発。

カリルは両手で少しだけ赤くなった額を押さえた。

「ったく、これだから純粹培養の天然娘は…」

ラムザの生きてきた世界にはこれ程純粹無垢な性格の人間は存在しない。むしろ人に責任を押し付けのしあがっていく人間たちばかりだった。だからこそ新鮮。保護欲を駆り立てられる。

「ほら、行くぞ」

「…はい」

森の中、自然に出来た獣道をラムザがカリルの手を引いて歩いていく。カリルが転ばないように歩幅を合わせて歩くあたり、妹であるソフィーナの影響がみてとれる。

「…お優しいですね、ラムザさん」

「なんの話だ？」

「クス。なんでもありません♪」

落ち込んだり笑顔になったりとカリルの表情は変化に富んでいる。別の名で現金な奴とも言うが、ともかくカリルの顔に笑顔が戻ったのは確かだった。

「あの、ラムザさん」

「ん？」

「呼んでみただけですよ♪」

「…なんだそりゃ」

花が咲いた、とはこのことか。

一転して嬉しそうに繋がれた手を振りながら歩くカリムに今度はラムザが引かれて続く。

カリムのご機嫌な様子は念話を聞いて探しに来たシャツハと会うまで続くのであった。

接触

二筋の剣閃が空中に煌めく。

右へ左へ、或いは上へ下へ。ある時には払い上げ、またある時には袈裟から切り下げる。

武の道も極めれば舞に通じる。蝶のように優雅に舞い、蜂のように苛烈に刺す。どれだけ言葉を尽くしても二人の戦いを形容するには物足りない。

片や結い上げた桃色の髪を揺り動かし、炎を纏いし刃を振る凜々しい女性。古代ベルカ式ロストログア『夜天の書』に宿る守護騎士の一人、烈火の騎士シグナム。

片や万人を救済する聖母のごとき笑みを内に隠し、トンファア型デバイスを扱う可愛らしい女性。同じく古代ベルカ式の魔法式を操る聖王教会所属騎士団の一人、シスターシャツハ。

共に魔導師ランクAAAという管理世界有数の使い手。そんな二人の熾烈を極める模擬戦を、ラムザは欠伸をしながら見ているのだった。

「…ふあ、…眠い」

「あの二人の模擬戦を前にして眠いとか、アンタもええ加減に大物やな」

ベンチに座るラムザの横には一人の少女が座っていた。

茶色の髪と明るい笑顔。同世代の少女よりも一回り小さい身体は男の持つ保護欲を的確に擦ってくる。

「眠いもんは眠いんだよ、チビ狸。それに生憎と俺は他人の喧嘩に興味はないんでな」

口に手を当ててラムザは欠伸を隠す。

「チビ言うな。それに私は狸ちゃうわ！こんなどこに出しても恥ずかしい美少女掴まえて何てこと言うねん、ホンマに」

「…自分で美少女とか言ってるよ、おい」

管理局の制服を着た自称美少女は、しかしその年齢にしては着ている制服が不釣り合い。彼女が着ている制服は確かに時空管理局の本局職員のもの。良し悪しは別として、年齢が一桁の時から働き始める職員も管理局にはいる。彼女の年齢からすれば“時空管理局の制服を着ていること”自体に問題はない。問題があるとすればその制服が表す時空管理局内における権力階級。

「まあ美少女かどうかは横に置くとしても、彼の高名な才媛でいらっしやる『八神はやて三等陸佐』にお会いできるとは思いませんでしたよ」

八神はやて。

カイルの持つ『時空管理局所属職員情報データベース』を見るまでもなく、彼女のことならラムザも知っている。陸の若きエース。次世代の英雄。麗しき出世頭。新しき時空管理局を担う者。しかし様々な呼び名の中でも、彼女を最も的確に表す言葉がある。即ち――

――『夜天の主』

守護騎士を名乗る四人と一匹の精鋭を率いる彼女の姿は見る者を魅了するという。

「…なんか誉められとる気がせんねやけど」

「そりゃそうだ。だって誉めてないからな」

「よっしゃ。ちょっと面貸したらんかい」

「時空管理局職員法第二十三条『すべての職員は全体の奉仕者であり、また、その身分は管理内世界に居住するすべての市民の信任によってのみ基づく』——か弱い一般市民に管理局職員が手え出すつもりか？」

「ぐぬぬっ！？ かわいいやっちゃなあつ、自分!!」

「法治国家における法知識は自己防衛手段だ。よく覚えとくんだな、佐官様」

リンディⅡハラオウンの手によって時空管理局をクビになったラムザはもはや一般市民。か弱いかどうかに疑問は残るが、守らなければならぬ者という範疇にはなんの問題もなく当てはまる。

「いけませんよ、ラムザさん。あまりはやてをいじめては」

「いじめちゃいない。これは単に親愛の表現として“弄ってる”んだ。そうだろ関西人？」

「∴随分と“管理外世界”の文化に詳しいやん」

「俺の友人の言葉を教えてやろう。『情報は兵器だ。たとえ使わなくても、ただ持っているという事実だけで強者になれる』」

友人が誰か、とは敢えて言うまでもない。

「お前もその年齢で佐官にまで登りつめた人間なら分かるだろ、元『闇の書』の主である八神はやて“ちゃん”？」

「っ!？」

八神はやての持つロストログア『夜天の書』に関しては、その成立過程から管理局内でも秘匿事項とされている。少なくとも陸尉ごときが得られる情報ではない。

「…なるほどなあ。リンディさんもレティさんも、ホンマに厄介な男を寄越してくれたもんや」

「安心しろ。俺の信条は『勤務時間以外は働かない』と『上司の命令には黙って従え』だ。勤務時間内なら俺はそこにいる天然金髪シスターに逆らうことはない」

指を指されたカリムは可愛らしく首を傾げながらラムザに反応する。数時間前から上司となった心優しい聖母はある意味において無敵だった。

「おトクな性格というか人格だよなあ」

敵が無いとはなんとも羨ましいことだ。きっとカリムは今まで本気で誰かと対立したことなんてないのだろう。相手に敵対心を持たせない人間は強い。

対立とは言わば戦力の戦力の磨耗だ。強化を意味する共存とは根本的に問題にならない。

「その若さと性格でよくも少将なんて階級に登れたものだ。感心と敬意を評さずにはいられないな」

シャツハが側にいるとはいえ、カリムⅡグラシアという人間は基本的に性善説の範疇に立つ人間。人間とは生まれながらにして善人である。法治主義で塗り固められた世界に生きる人間としては奇跡的な生き方。そんな生き方を現在進行形で続けているカリムⅡグラシアは、ラムザの目には正しく狂っているように見えた。

「まあカリムの場合はちょっと特例やけどね」

「お前が言うな、特例中の特例が」

広大なミッドチルダにおいて、或いは数多く存在する時空管理局職員において、八神はやてほどの特例はいない。

「ふふん。羨ましいやろ」

「面倒なことは勘弁願いたいな。俺はしがない事務員で十分。人間一人が生きていけるだけの収入と、老後に向けてある程度の貯蓄が出来ればそれでいい」

「男とは思われへん向上心のなさやな。だからモテへんのちゃうか？」

「うるせえ」

はやての頭をラムザが小突く。関西人ゆえの反応なのか、どこか楽しそうにはやても頭を差し出した。

「いつも俺の隣に常識はずれのイケメンがいるんだからしょうがねえんだよ」

「ほほう。まあ男を顔だけで選んでる間はまだまだエエ女には早いな」

腕を組み、うんうんとはやてが首を縦に振る。

「お、流石分かる女、八神はやてだ。今の発言で俺の中の好感度が鰻登り間違いな――」

「でも!!」

ラムザの言葉を遮りはやてが更に身を寄せる。

「一応その友達の名前だけは気いとか!!」

「…お前もか」

目を輝かせるはやてにラムザはため息を一つ。女の気持ちも分かるだけにやる瀬ない。ラムザとてブサイクよりは美人の方が何倍もいい。

「よし、等価交換といこうじゃねえか。お前が美人のダチを紹介してくれるんなら俺にも利はある」

だからこそラムザもへこたれない。そっちがその気ならこっちにも考えがある。美人の友達は美人。類は友を呼ぶはずだ。

「その話乗った!」

「即答かよっ!？」

「イケメンは人類の宝！こればかりは何者にも代えられへん！！」
力強く答えるはやての手は震えるほどに握られている。
八神はやて十九歳。彼氏いない歴〓年齢を更新するにはキツイことを感じてきていた。

「じゃあ取り敢えずお互いに手札を一枚切ろうじゃないか。こっちの手札は『名前』だ」

「オッケーや。私もその手札から切るわ」

そうしてお互いに告げた名前は、しかしラムザには聞き覚えがあつてもはやてははじめて聞く名前だった。

「カイル〓バルカス？」

「高町なのは、ね」

高町なのはといえば時空管理局の空におけるエースオブエース。純白の衣を纏って空を駆る彼女の姿はさながら天使のようだという噂だ。当然容姿は端麗。ラムザも一度だけ遠目にみたことがある。感想はもちろん美人の一言に尽きる。

「なら二枚目は少し踏み込んで『写真』といこうか」

ラムザが管理局からの横流しで個人的に手に入れたデバイス（支給品を自主改造）から電子ウィンドウを開く。

「どうする？」

「乗った！」

同じくはやても夜天の書を媒介に一枚の写真を掲示する。

「「こ、これは…っ!？」」

見せあった写真を見て、二人はお互いに息を呑んだ。

「この見えそうで見えない太股のチラリズム!あと少し動けば溢れるかもしれない胸元!!!」

「この細く長い指!引き締まった身体!着崩したスーツから醸し出された男の色気!!!」

二人は同時に叫び、また同時に顔を見合わせた。

「八神!!!」

「ラムザくん!!!」

そしてお互いに強く手を握りしめ合う。

「「グッジョブ
GJ!!!」」

ラムザが手にしたのはベッドで寝ている一人の女性の写真。気持ち良さそうに穏やかな顔で眠りながらも、寝返りで乱れたパジャマからは艶かしく肢体が伸びている。

対してはやてが手に入れたのはある一人の男の写真。長い足を組み、ホストのような服装でポーズをきめる姿は男の色気が感じられる。

食い入るように写真を見る二人。

しかし不意にその写真が上へと持ち上がる。

「お？」

「へ？」

「…ラムザさん、はやて」

二人がつられて上を見ると、そこには悲しい目をしたシスターがいた。

「…勝手に人の写真を交換するなんて関心しませんよ？」

ぶく、とカリムが可愛らしく頬を膨らませる。

「いいんだよ、別に」

「気にしたらアカンで、カリム」

だが二人は気にした様子もなく写真を取り返すと、胸ポケットへと大切にしまった。

「…主はやて」

「…ラムザ」

カリムを振りきり前を見る。するとそこにはいつの間にか模擬戦を終えたシグナムとシャツハが立っていた。

「な、なんやシグナム、そんな怖い顔して」

「シャツハもどうした？男が美人な女の写真を手に入れようと努力するなんて当たり前だろ？」

恐々とするはやてと意に介した様子を見せないラムザ。育った環境かそれとも見てきた価値観の違いか。ラムザにとってはむしろ何故二人が呆れた声を挙げるのかが分からなかった。

「ラムザ。貴方も今日からは教会に身を置くのですから、その様な周囲から見映えの悪い行動は極力控えていただきたい」

「恋愛は三大欲求のうち、性欲に該当する。役職以前に人間としてあるべき姿だろ？」

「これからカリムの側近として働くことになる以上、貴方の評判はカリムの評価に影響します。期限付きですし、仕事だと思って諦めて下さい」

「…はあ」

理不尽だ。絶望の淵にいながらラムザは心の中で呟いた。

「主はやても今はもっとやらなければならないことがあるでしょう？」

「あ、あはは…」

「今は主はやての夢が叶うかどうかの瀬戸際。他の諸事に囚われるのは止めた方がいいのではありませんか？」

諭すシグナムに、はやては冷や汗混じりに頬を搔く。

今回の話ははやてが数年かけて取り掛かってきた仕事の集大成。他ならぬ自身の願望に友人たちを巻き込んだ手前、はやてにはシグナムの言葉に反論する術はなかった。

「「ということですから、写真は没収させていただきます」」

それぞれラムザとはやての胸ポケットから写真を取りだし、二人はくしゃくしゃに丸める。

「まったく、我ながら面倒な場所に来ちまったもんだ」

「うう…、また一年間の我慢期間かあ…」

不貞腐れて煙草を吹かすラムザは、しかし伸びてきた細く長い指に煙草を取られる。

「…フイ」

「ここは禁煙です」

「……………」

シャツハの言葉にラムザは押し黙る。どうやら教会に所属する間の一年間はひたすらシャツハの尻に敷かれそうだ。

「主はやて、そろそろ真面目な話をしましょう」

剣を納めたシグナムが、管理局の制服に身を包んで言う。真剣な目

で見つめられたはやても素直に姿勢を正す。

「ラムザくん」

「んー？」

「私たちはこれから一年間後の新部隊設立に向けて佳境に入ります」

「そうだな」

「その為にラムザくんには後見人であるカリムやリンディさんの手足になって色々と動いてもらう予定です」

「一応、俺は時空管理局に解雇された身なんだが？」

「冗談。ラムザくんも分かつとるはずや。扱いは解雇でも、これがホンマは実質的にただの出向やって」

解雇になったのは事実。されどはやての言っていることもまた真実。管理局の職員なら他からの目がある。それが協力者の中心であるリンディⅡハラオウン、またその友人であるレティⅡロウランならさらに厳しい。

「しかし時空管理局の外、解雇された一般市民がどう動いても自由だと？」

「うまい具合にラムザくんには叩けば出てくる埃が幾つかあったかなあ」

「人事部のロウラン提督に『優秀で信頼できる、行動力に長けた人

材が欲しい』とハラオウン総務統括官を通じて私がお願いしました」
丁度シャツハの他にもう一人秘書官が欲しかったんです、とカリムが屈託のない笑みを浮かべる。

「今回の件は大きな話や。なんせエリート集団の機動課に部隊を一つ追加しようっちゅうんやからな」

「しかも集まる人材はこれからの管理局を担う若きエースたち。常時魔導師不足で頭を悩ませている陸にとっては喧嘩を売ってるとしか思えない政策だな」

そう言っただけラムザははやてに一枚の書類を掲示する。

これがラムザⅡトラパントが出す手札の一枚。まだ誰も、動いている当人たちしか知らないはずの書類の存在。

「時空管理局特別捜査官にして最年少佐官、八神はやて。同、本局執務官にして時空管理局有数の名門ハラオウン家の息女、フェイトⅡテストロッサⅡハラオウン。
空が誇る絶対的エース、管理局の切り札、エースオブエース高町なのは」

「っ!？」

目を見張るはやてを無視してラムザは更に言葉を重ねる。

「ここまでならまあ興味がそそられないと言えば嘘になるが、俺には関係のない話で終わる」

「……………」

「でもそのまま下にいけば俺にとっても話は無関係じゃなくなる要因が一つ混じってやがるのはお前が一番よく知ってるな、八神はやて」

そこにはもう一つ名前が書かれている。即ち『ソフィーナ||トラパント』他の誰でもない。それは――

「うちの妹まで抱き込んで、お前ら一体なに考えてやがる？」

家族の中で誰よりも大切な妹だからこそ、ラムザの瞳にいつものおふざけはない。

考えてみても分からないことは本人に訊ねるのが最も早い。ラムザの追求に、次ははやてがため息をばく番だった。

再会

「まったく、貴女も人が悪い」

「ありがとう。今は誉め言葉として受け取っておくわ」

時空管理局本局にある総務部の長が詰める執務室の中、リンディⅡハラオウンとカイルⅡバルカスが仕事をこなしていた。

「…こんなことになるなら、僕も管理局を辞めておけばよかったな」

「あら冷たい。まるで私が貴方を酷くこき使っているみたいな言い方をするのね」

「まるで、じゃなくてそう言っているんですよ」

トントン、と判を押した書類をファイルに纏めてカイルが横の執務机にいるリンディに渡す。

受け取ったリンディはざっとした確認のために視線を走らせ直ぐに視線を部署ごとに分けられた箱に入れる。

「…いつも思うんだけど、どうしてこんな魔法科学全盛時代なのに一枚一枚自分で確認しなきゃいけないのかしら」

「魔法科学に基礎づいた電子ソフトでは、本人確認が取れないからでしょう？」

「パーソナルデータならリンカーコアからが認証出来るでしょ？」

「そうでもないですよ。どれだけ発展した科学分野でも、その分必ずハッカーが存在しますから」

「…ままならないものよねえ」

頬に手を当て、リンディが妙に色気溢れるため息をつく。

普通の男ならば間違いなく堕ちる未亡人の色気だが、残念ながらカイルは色んな意味で普通ではなかった。

「どうぞ、次の書類です」

淡々と、機械的にカイルはリンディに書類を渡す。

「…冷たいわ、カイルくん」

「すみません。どうも僕は好意の持てない人には冷たくなってしま
うようなんですよ」

言外に、お前のことは好きじゃない、と告げるカイルは一番の笑顔を見せる。

「…上司としてカイルくんには優しさを要求します」

「部下として理不尽な上司の要求には断固却下します」

「…ぐすん」

「四十路が泣き真似なんかしても可愛くないですよ。自分の年齢を
考えて下さい」

遠慮のない痛烈なカイルの言葉がリンディを傷つける。もはや億劫になっているのか、上司と話しているのに言葉がぞんざいである。

「そ、そんな風に私のことを見ていたの!？」

「はい。一般基準とは解離した美貌の持ち主だとは認めますが、流石に十代の女の子がするようなことをするのは正直痛々しいですよ?」

「:ちょっとだけ泣いてもいいかしら」

「勤務時間外ならどうぞ好きなだけ泣いて下さい」

勤務時間内は会社から給料を受け取っている身。自分のことで時間を使っているはずもない。

「:…人事の配置を間違えたかしら?」

カイルには聞こえないように呟き、リンディは再びため息をつく。仕事は出来るが性格に難のある二人組。リンディはレティから教えられた情報の正確性をようやく知った。

「ハラOWN総務統括官」

思い耽るリンディの意識が不意に声を認識する。

「なにかしら、カイルくん?」

「お客様のようです」

「お客様？」

「はい。お通ししてもよろしいでしょうか？」

「ええ、お願い」

カイルが電子ウィンドウを通じて入室の許可を与えると、扉が開いて一人の少女が執務室へ入ってきた。流れるような金色の髪と端正な顔、スーツの上からでもそれと分かる豊満な胸は今まで何人の男を釘付けにしたのか分らない。リンディⅡハラオウンの一人娘であるフェイトⅡテストロッサⅡハラオウン。管理局でも有名な美少女がそこにいた。

「久しぶり、母さん。元気そうでよかったよ」

心地よいソプラノが執務室に響く。

「フェイトも元気そうね。あんまり顔を出してくれないから母さん寂しかったわ」

カイルとの会話とは比較にならないほどの喜色がリンディの声にこもる。傷ついたリンディの心は愛する娘の一言で忽ち回復していく。お互い懐かしそうに見つめ合う二人。しかしそんな雰囲気を知っていながらも嬉々としてぶち壊す男がこの部屋にはいる。

「ハラオウン総務統括官、仕事をして下さい」

リンディの目の前に追加分となる書類を置きつつカイルが言う。

「ええ、忙しい仕事の合間にせっかくフェイトが来てくれたのよ

!?!」

「勤務時間中ですから関係ありません」

「お願いっ、ちょっとだけでいいの!!」

必死に頭を下げて頼むリンディ。完全な自業自得だが、カイルを秘書官として以来、リンディは常に監視状態に置かれてサボる間もないほどに仕事をさせられていた。半ばカイルの八つ当たりも混じっているが。とにかくにもリンディのストレスは割りと限界に近付いていた。

「そこまで言うのなら構いませんが、僕はいつも通り定時に帰宅しますから、残った分は一人で片して下さいね?」

「そ、それは…」

終わるわけがない。

現在も二人で八時間働いてギリギリのラインで仕事をしている状態。きつとフェイトと話せば数時間になる。そうなれば徹夜コースは間違いない。四十路になっての徹夜はキツイ。主に肌と髪と翌日の調子的な意味で。

「母さ——」

「もちろんハラOWN執務官が手伝うことは許しませんよ?他部署の人間に見せられる書類は一枚ありません。どうしても見たい書類があるなら公式な書類で申請手続きをしてからお願ひします」

「…あう」

「そもそも一執務官に過ぎない貴女が母親とはいえ総務統括官クラスを受け持つ書類を簡単に見られるとは思わないで下さい」

組織という構造上、時空管理局は部署同士の対立が顕著に激しい。例えば大きな枠組みとしては『陸』と『海』あるいは小さな枠組みとしては部署同士。縦割り行政となっている時空管理局の特性上は仕方がない対立。

現在のカイルの役職は『時空管理局本局総務部総務統括官リンディⅡハラオウン付け特別第一秘書官』というなんとも長ったらしい地位。所属が『陸』である以上は『海』所属の人間に重要書類を見せるわけにはいかない。

結果として、リンディは泣く泣く仕事をしながらの会話となった。

「もうっ、カイルくんって仕事は出来るけど融通がきかないのよね」

「か、母さん!？」

「構いませんよ、ハラオウン執務官。僕だってもう慣れてますから」

「…そう、なの？」

「毎日のことですから」

「………」

啞然とするフェイトを余所に相変わらずリンディは文句を言い、カイルはそれをいなしながら的確なタイミングで書類をリンディの執務机に置いていく。

阿吽の呼吸で繰り返される二人のやり取りに、フェイトは「ベスト

コンビニ?」とむしろ逆に納得してしまう。

「そういえばハラOWN執務官。何か総務統括官に話があって来られたのでは?」

行儀よく椅子に座って二人を眺めていたフェイトにカイルが声をかける。

「…え?」

「違うんですか?」

「えっと…、…あぁっ!? そ、そうだった!!」

フェイトは椅子から立ち上がり、淹れてもらったコーヒーを机に置く。とリンディの執務机に詰め寄る。

「今日は母さんにコレを渡そうと思って」

フェイトは自らの電子ウィンドウを展開する。そして同時にリンディがフェイトに気付かれないように横目でカイルを見た。

「エリオのこ——」

「ハラOWN総務統括官。少し書類上で気になる箇所があるので担当者に直接確認を取りにいつてきます」

「ええ、お願いね」

「え?..え?」

唐突な二人の会話にフェイトは意味が分からず混乱している。
しかしそんなフェイトを無視してカイルはフェイトの横を抜けて退出していく。

「ではハラOWN執務官、ごゆっくり」

「は、はい！」

「総務統括官は、もしサボったらその分は自分に返ってくることをお忘れにならないようにして下さい」

「分かってるわよう。もうっ、そんないじわるな言い方しなくてもいいじゃない…」

「申し訳ありません。釘を刺しておかなければ不安なもので」

にっこり笑顔で二人に一礼。

カイルはリンディの執務室から出ていった。



「…ウザい」

管理局本局の廊下を歩きながら、カイルは一人ボソツと小さく呟いた。

「…はあ、…なんかもう面倒くさいなあ」

いきなり部署を移動したせいでここには気の合う友人はいない。それ以前にたかが三等陸尉——改め『一等陸尉』が総務統括官の側近などという異例の大出世を果たせば妬み恨みが集まって友人など出来ようはずもない。

「…僕も辞めようかなあ、管理局」

そもそもカイルが時空管理局に入局した理由はラムザが入局するからということに大きく由来する。それなのに当のラムザ、或いはソフィーナとも別れてしまえば働く価値も意義も意味も何もない。唯一の対価として得られる金銭についても、実のところカイルにはあまり必要がない。何故ならカイルの口座には既に十桁にのぼる資金が貯金してあるからだ。方法はもちろん株式売買。情報を武器とし広大な網を持つカイルにとってはもってこいの方法である。

「…食堂に美味しいものでも食べに行こう」

こんな時には気分転換が必要だ。気分が乗らない以上は無理に仕事をしても仕方がない。頭にも入らないしミスも多くなる。

だから少しぐらい寄り道しても別にいいや、とカイルは自己完結。管理局の廊下を食堂に向かって歩く。

するとその途中で見つけた一人の愉快な人間。特徴的に栗色の髪をサイドポニーで纏めている、現在の時空管理局の若手では間違いない最も有名な女性。

「高町なのは？」

なのは横にいる赤い髪をした小柄な少女と笑いながら食券販売機の前に立っていた。

「…ということは、横にいるのは八神ヴィータか」

鉄槌の騎士。紅の護り手。夜天の守護者。小柄な少女の姿ながらもその体軀からは想像も出来ない実力をもつ魔導師。

「…ふーん」

こんな“下らないこと”に自分たちを巻き込んでおいて、貴女たちはのんびり昼食ですか。
心の中で皮肉を呟きながらカイルは二人の数人後ろに並んだ。

「――が、――で、――なの」

「――ろ？」

何か話しているのは聞こえるが、その内容までは把握出来ない。

「――」

「――」

「――」

「――」

暫しそうして二人の様子を窺っていると、各々注文した商品を持った二人は空いている席に座った。

「……………」

カイルも注文した商品○を持つと黙って二人の座った席の隣へ座る。距離がこれだけ近付けば、当然二人の話し声も聞こえてくる。

「——でね、フェイトちゃんたらまた任務で無茶して帰ってきたんだよ」

「お前は人のことを言えた義理じゃねーけどな」

「私、最近はそんなに無理はしてないよ!？」

どうやら食堂にいるということすら二人の頭にはないらしい。ただでさえ有名な二人が並んで座っているために注目を集めているというのに、なのはの叫びで更に周囲の目を引いている。

「…有名税ってやつかな」

小さく呟いたカイルの心に満ちるのは自らの過去。失った、或いは捨て去ったはずの思い出。嫌が応にも周囲から奇異と懷疑、畏怖と敬意、憎悪と嫉妬の視線を向けられるなんて、なんとも気持ちが悪い。

「…ウザいな、コイツら」

「——え？」

席を立ったカイルの背を、耳に響いた声を追うようになのはが振り返った。

「どうした？」

「…ううん、なんでもないよ」

どうやらカイルの呟きが聞こえていなかったヴィータを誤魔化しながら、なのはは横目でカイルを見る。

「あ、あれ？」

しかし既にカイルの姿は食堂にはなかった。



早足で食堂から出たカイルは、リンディの執務室に向かいながら珍しく舌を打った。

「……………」

アイツらを見ていると昔の自分を思い出す。切り捨てたはずの自分を省みるのは酷く不快でイライラする。

「…どうしてこういう時に限っていないかなあつ、ラムザは」

不思議と一緒にいると精神安定剤の役割となる昔馴染を思うと更にイライラが増す。そしてそのイライラが連鎖反応を起こしてリン

ディやレティに飛び火する。自分達を巻き込んだ張本人たちに。

「——ていうかさ、どうして“俺”たちがこんな面倒なことに巻き込まれなきゃなんないのかなあ」

ホント、面倒だなあ。サボろうかなあ。カイルの中にある本音が溢れる。

「…バーカ」

呟く。

「ラムザのバーカ」

更に呟く。

「バーカバーカバーカバーカバーカバーカバーカバーカバーカ…」

果てしなく不毛で途方もなく哀しい。聞く人のいないはずの愚痴だった。本来ならば。

「…か、カイル…さん？」

背後からかけられる女性の声。振り返ればそこには白髪赤眼、平均的な女性の身長よりも僅かばかり高い女性がいた。

「…ソフィーナ、ちゃん？」

ソフィーナⅡトラパント。

親友にしてカイルの昔馴染みであるラムザートラパントの妹。

そして——カイルが唯一本気で惚れた女性であった。

密談

「本当にお久し振りですね。あまりお会いに行くことが出来ず、申し訳ありませんでした」

「いいよいいよ、そんなこと。全然気にしないで構わないから」

ミッドチルダの首都、クラナガン。管理世界の中心地ということもあり、様々な世界の文化が流入、深化、統合され、他に類がない繁栄を見せていた。

そんなクラナガンの某喫茶店にて、カイルはソフィーナと優雅にお茶会を催していた。

「僕はこうしてソフィーナちゃんとお茶が飲めるだけで幸せだから」

「相変わらずカイルさんはご冗談が上手ですね」

「冗談じゃないよ、僕はこれでも本気だから」

「ふふふ、ありがとうございます」

これが本当にラムザと血の繋がった妹か、とカイルは何度思ったのか分からない。

カップを持つ仕草一つとってもソフィーナからは余人を引き寄せない気品が出ている。悪く言えば粗野で横暴、そして自分勝手なライルとは大違いだ。

もちろんカイルはソフィーナにそのことを告げようとは思わない。惚れた女に嫌われるようなことを言えようもない。

だからこそソフィーナに対してカイルが嘘を言えるはずがなかった。

「カイルさんは今どちらに所属しているんですか？」

ソフィーナからすれば近況報告と同じような意味合いの問い掛け。しかしカイルにとっては現在関わっている仕事の核心部分。いくらリンディやレティ、それになのはたちが気に入らないからといって、機密を話すわけにはいかない。いかないのだが――…

「今は総務部リンディⅡハラOWN統括官の秘書官みたいなことをしてるよ」

最初からカイルに選択肢など存在しない。例え誰に頼まれようとカイルは無駄働きはしない。それはラムザとて同じ。例外はいない。なんの苦勞も無しにカイルが握る膨大な情報を閲覧することは出来ない。

「え、リンディさん？」

「うん。八神陸佐たちが作ろうとしてる新部隊の件でちょっとね」

だが、この広大な次元世界の中でただ一人だけその範疇を越える者がいる。

ソフィーナⅡトラパント。

カイルの真の姿を知っている者ならば誰もが欲する数多の情報を、ソフィーナはカイルに一声掛けるだけで得ることが出来る。

「……………」

何かを思案しているソフィーナの顔をカイルは見つめる。

「――あの、このことを兄さんは…」

「もちろん知ってるよ。ラムザも僕と同じ巻き込まれたクチだからね」

「…やはり、そうでしたか」

「やはり？」

「…最近、兄さんの帰りが妙に遅いので何かあるとは思っていました」

深いため息と共にソフィーナが額に手を当てる。

何をしているのか分からない不安が僅かばかりでも解消されたことに安堵を得た。

しかし逆に面倒なことに巻き込まれたという新たな心配の種が生まれた。

「ひょっとして毎日ラムザが帰ってくるまで起きてるの？」

「勿論です――あ」

うっかり飛び出した言葉を打ち消すようにソフィーナは口を閉ざす。今のは言っただけな気がした。

「い、今のは兄さんには秘密にしてください！兄さんは私が眠っていると思っているので、その…」

頬を赤く染めてソフィーナが口ごもる。小さな、本当に些細なソフィーナの幸せな時間。居間で眠る自分を夜遅く帰ってきた兄が部屋のベッドまで運んでくれる。それが嬉しくて毎日眠ったフリをしてしまう。顔が緩んでしまうのを我慢して耐える三分にも満たない時間。きつと兄が知れば早く寝ろと怒るだろう。

「分かってるよ。僕がソフィーナちゃんが困ることをするわけないでしょ？」

「…申し訳ございません」

「ほら、そんな暗い顔しない。僕が好きなソフィーナちゃんは、綺麗な笑顔のソフィーナちゃんだよ」

相手を笑顔にするにはまず自分から。ソフィーナと視線を絡ませたカイルは他の女性が見れば確実に堕ちるだろう笑みを浮かべる。

「…カイルさん」

「うん。やっぱりそっちの方がソフィーナちゃんにはよく似合うね」

暗い表情を崩したソフィーナを見ながらカイルは思う。

おそらくラムザは気付いていて何も言わないのでは、と。義理堅いラムザのことだ。きつと忙しくて構ってあげられない申し訳なさがラムザの口を閉ざさせているのだろう。

「一つだけ、訊いてもよろしいでしょうか？」

「なにかな？」

「兄さんは…今どちらにいらっしゃるのでしょうか？」

愛する女性の不安に揺れる瞳がカイルを捉える。

カイルも本音を言えばソフィーナの兄であるラムザに対する嫉妬が無いわけではない。兄以前に同じ男として、或いは好きな女性が好意を向ける相手としてラムザには妬ける。

しかしラムザとソフィーナの絆を知るだけにカイルには何も言うことが出来ない。

内側で渦巻く真っ黒な感情を押し留めてカイルは笑う。

「ラムザなら、今は――」

答えようとしたラムザの口に重ねられた白魚のように美しく白い手。横から差し出された手をそのまま目で追っていく。するとそこには悲しげな瞳でカイルを見つめるリンディがいた。

「り、リンディさん!？」

「こんにちは、ソフィーナさん。こうして実際に顔を合わせるのは久しぶりね」

「……………」

いきなり現れたリンディに、ソフィーナは恐縮して立ち上がり、カイルは視線だけを上げる。

「カイルくん」

リンディもソフィーナから視線を外してカイルを見る。

「すっごく残念だわ。まさか貴方がこんなところで仕事をサボってまで友達の妹さんをナンパしてるなんて」

「……………」

殊更肩を落として大袈裟に残念がるリンディは、黙ったまま何も言わないカイルへと見当違いの話をする。そもそも口を遮られた状態では何か言いたくても何も言えないのだが。

「リンディさんっ、これは違うんです！これは私が——っ」

誤解を解こうとするソフィーナだったが、しかしそれは当のカイル本人の手によって制される。何も言わなくていい。口ではなく手でそう語られる。

「それじゃあ行きましようか。まだまだやらなきゃいけない仕事が溜まってるわよ」

口から腕へとずらされたリンディの手に誘われ、カイルは席を立つ。

「ゴメンね、ソフィーナちゃん。どうやらもう行かなきゃいけないらしいや」

「いえ、こちらこそお時間を頂いてしまって申し訳ありませんでした」

「ううん、僕もソフィーナちゃんと話せて嬉しかったよ」

カイルが二人分の珈琲代を店員に渡す。

「あ、私の分は自分で払います」

「ストップ」

鞆から取り出したソフィーナの財布をカイルが手で押さえる。

「ダメ。こういうところで男がお金を出したら素直にお礼を言うの
がいい女だよ、ソフィーナちゃん」

「…この間も結局そう仰って御馳走になりましたよね？」

「男として、好きな女性に食事のお金を払わせるわけないでしょ？」

「…もう、カイルさんったら」

呆れた声を溢しながらソフィーナが財布をしまう。こうなったカイルはどうあっても自分の言うことを聞いてはくれない。こういうところが本当に自分の兄と似ている。

「では今回“も”御馳走になります。この代わりはいずれ何らかの形で返させていただきます」

「期待してるよ」

借りを受けた時のソフィーナは頑なに譲らない。こういうところは本当に彼女の兄と似ている。

「さて、それじゃあ行きましようか、ハラオウン統括官」

絡まれた腕をほどき、自由になって手をマッサージしながらカイル

が告げる。

「連絡してくれたら僕はいつでも何処でもソフィーナちゃんのために駆け付けるから、気軽に連絡してくれればいいからね」

「ありがとうございます」

比喩抜き。たとえそれが任務中であろうとも、カイルならば本気で任務を投げ出して駆け付けるだろう。

「じゃあまたね、ソフィーナちゃん」

「はい、ではまた」

ソフィーナが頭を下げてカイルに一礼。そして一度顔を上げると次はリンディに向かって頭を下げる。

礼儀正しく常に優雅たれと教えられたソフィーナがその場を立ち去ったのは、その直ぐ後の話であった。



「ありがとうございました」

「え？」

管理局への道のりを並んで歩きながら、カイルはリンディに対して

先程の礼を述べる。

「柄にもなく少しラムザに嫉妬してしまいました。あの時止めて頂けなければ、恐らくラムザのことを話していたと思います」

ラムザⅡトラバントの処遇は、本人の知らぬところでいつの間にか一部の上層部ではトップシークレットの扱いとなっていた。

その一部とはリンディやレティを始めとする“海”出身のエリート組であり、かつ、機動六課設立に賛意を示している者。

即ち八神はやての提案を支持している者たちのことである。

「機動六課と聖王教会の繋がりはいくまでも八神はやて陸佐の個人的なネットワーク。総務部のトップである貴女が裏から手を回しているなんて話は絶対にバレてはいけない」

もし、仮にバレたとなると管理局を騒がす大問題。総務部のトップが娘の友人を“個人的な理由で”課長にした噂されることは避けられず、悪ければ事態収拾のためにリンディは管理局をクビになりかねない。

そうなれば管理局の中でも五指に入る権力者の凋落。スキャンダル。管理局全体の信用が地に落ちる。それはつまり次元世界の混乱に繋がる。

「それは流石に私も困るのよねえ」

「ソフィーナちゃんに嘘や誤魔化しは言えないので」

「：ソフィーナさん自身に問題はないんだけど一応、ねえ？」

現在リンディたちが渡っている橋はかなり危険度の高いもの。万が

一にも何処かで反対派に秘密がバレれば大変なことになる。

盗聴器や盗撮器が何処に仕掛けてあるのかが分からない以上、常に気を張っていないければならない。

「あと一年、大丈夫かしら：」

レティから受け継いだ癖はあるが優秀な二人。その癖があまりにも強すぎてリンディにも中々御しづらい。

「なんなら元の部所に戻していただいても構いませんよ？」

「それはないわ。貴方の場合はソフィーナさんに会いさえしなければ十分優秀で使える職員ですもの」

そしてその機会はこれから一年間という期限付きで我慢してもらう。八神はやての夢のために、カイルⅡバルカスは礎としてある程度の犠牲を負う。そしてリンディⅡハラオウンはそういう犠牲には心を痛めながらも受容する。

身内に優しいというのは言葉を返せば他人に厳しいということになる。リンディⅡハラオウンは優しい上司ではあるものの、身内のためなら誰かに犠牲を求めることも時にはいとわない。

「ラムザとは疎遠になって、ソフィーナちゃんとは話しちゃいけない。：何が楽しいんだろうね、こんな仕事」

「仕事は楽しいことばかりじゃないわ。時にはツライことも我慢しなければならぬこともあるのよ」

「：まあ貴女たちのせいなんですけどね」

全ては八神はやてが主導する新部隊設立計画に巻き込まれたことに起因する問題。

「さ、早く仕事に戻りましょ」

「…はいはい」

露骨に話を逸らすリンディにカイルは大人しくついていく。いくら文句を言っても仕方がないことは存在する。管理局職員は上司の命令には従うしかない。

「あと一年、かぁ」

長いなぁ、と空を見上げながらカイルは小さく呟いた。

母親

爽やかな朝。朗らかな太陽の温もりと小鳥の囀りが耳に心地よく響く。

純白のベッドの上で可愛らしい寝息をたてるカリム。呼吸と同時に胸が上下し、時には小さく唸りながら寝返りをうつ。余程いい夢を見ているのか、変わらぬ笑顔で眠り続ける。

純粹無垢な美少女の過ごす至福の一時。

しかしそんな神秘的な光景は“放り投げられた枕の衝撃”によって目を覚ますことになる。

「起きろ、寝坊助」
ねばすけ

「~~~~っ!？」

飛び起きたカリムがまず朝一番に見たのはここ数日で既に見慣れた顔。リンディを経由してレティから派遣された男、ラムザⅡトラパント。

「おはようさん、よく眠れたか？」

「∴貴方にもう少し慈悲の御心があれば爽やかな目覚めでした」

「そりゃ残念だったな。俺は目に見えない信仰よりも形に残るお金の方が大切だね」

「価値観は人それぞれです。ですが、貴方のその考え方は∴、∴同じ教会に身を置く者として少し寂しいですね」

カリムは影のある顔を僅かに伏せる。

「はいはい。御高説はいいから取り敢えずさっさと顔洗って着替えな、お嬢ちゃん」

「…私はもう二十一歳です。お嬢ちゃんと呼ばれる年齢ではありませんよ」

「色気のある関係でもない男の前で寝癖とパジャマ姿を見せてる女の何処がお嬢ちゃんじゃないって？」

「……ふえ？」

なにやら可愛らしく呟いたカリムは視線を横へずらし、鏡に映る現在の自分の姿を改めて見る。

艶のある繊細な髪は寝癖で跳ね、起きたばかりだから最低限の化粧もしていない。それになにより、着ている薄い青色のパジャマは第二ボタンまでが外れていて、本来なら誰も見ることが許されない純白のブラジャーが覗いている。

「……………」

「……………」

「…キ」

「…キ？」

「キャアアアアアッ！！！！？」

両腕で胸元を隠しながらカリムがベッドの中に潜り込む。

改めて見た自分の姿は聖職者として、騎士として、それよりもまず乙女として羞恥を感じずにはいられなかった。

男性の前でこんな無防備な姿を見せるなんてあり得ない。女性としての慎み、貞淑さに欠ける。

「みっ、みみみっ、見ないで下さい!？」

「今更何言ってるんだよ。毎朝見られてるだろ、俺に」

カリムの側近としてラムザに与えられた最初の仕事。それは毎朝カリムを六時ピッタリに起こすこと。既にかれこれ約四日。いい加減カリムも慣れていい頃だ。

「だから毎日“起こさなくとも構いません”って言ってるじゃないですかあ！」

「文句があるなら過去の自分に言うんだな。“遠慮なく何でも言うて下さいね（はあと）”なんて言われたら是非にとも弄り——もとい弄りたおしたくなるだろ？」

「“（はあと）”なんて言ってますし、言い直した意味がなくなってますから!！」

「そのツツコミを待ってたんだ。なら俺は敢えてこう言い返そう。
“ぐだぐだ言ってる間にその服ひっぺがすぞ”と」

「ひゃあっ!？」

再びベッドの中に潜り込んだカリムは、震える手でそつと顔の上半

分を毛布から出した。

「冗談だ、冗談」

「……」

「そんなに泣きそうな目で見るなよ。余計に弄りたくなったらどうしてくれる」

「……っ!？」

カリムの瞳に涙が浮かぶ。無意識の内に意味もわからず左右に視線を泳がせる。

「さて、それじゃ俺はボチボチ外で待ってるから、早く着替えて出てこいよ」

「…は、はい」

一通り弄りたおして満足したのか、ラムザがカリムの部屋から外に出る。

カリムはホッと一息つく。ラムザがいい人なのは短い付き合いながらもよく分かった。だが、どうやら彼には人をからかう趣味があるようだ。

不快と不愉快。両者に至るまでの絶妙な場所で止めるから、ある意味においてはかなりタチが悪い。

「本当に、ラムザさんが来てからリズムが狂ってしまいますねえ」

たった四日。それだけしか共にいないというのに、二十一年間も続

いていた静止状態が変化した。

決まった時刻に起床し、決まった時刻に朝食を取り、決まった時刻に執務を開始。そして決まった時刻に昼食を取り、決まった時刻に執務を終える。

つまらないと思ったことはないし、苦にしたこともない。それでも今の生活は普段に比べて何倍も刺激的に感じる。

「ふふっ」

顔が緩み、楽しい気分が口からもれる。今日もなんだか気分がいい。思わず鼻歌でも歌いたくなるような気分だ。

「♪」

ベッドから降りたカリムは、そのまま窓の欄干へと手を掛ける。

「おいで」

木の枝に留まっていた小鳥に指を差し出すと、小鳥は誘われるようにカリムの指に留まる。

「おはよう」

太陽の光を照明に、小鳥へ話し掛けるカリムはまるで一枚の絵画のように幻想的で神秘的な美しさを持つ。

聖母の微笑みを見せるカリムに小鳥も鳴き声で応える。しかし、そんな穏やかな時も長くは続かない。

——コンコン。

扉をノックする音が合わせて二回。向こう側からラムザの声がカリムに届く。

『おい、カリムー、二度寝してんのかー』

「してません。少し小鳥さんとお話していただけです」

『相変わらず電波してんなあ』

「電波、ですか？」

『いや、気にすんな。それよりもう着替えたか？さっさと支度を済ませないと、先に飯食っちゃうぞー』

「………」

カリムは再び鏡に映る自分を見る。当たり前だがさっきまでと何一つ変わらぬ自分がいた。

「も、申し訳ありません！今すぐ支度を致しますので、もう少しだけお待ち下さい！」

『了解。今日は午後から教会騎士団の会議があるから忘れんなよ』

「はい、もちろんです」

返事をしながらカリムはパジャマを脱いで正装に着替える。服装の乱れは心の乱れ。鏡の前で何度もおかしい所がないかをチェック。寝癖もドライヤーで直し、その他すべての支度が終わる頃には二十分が経っていた。

「お、お待たせ致しました」

大分待たせてしまった。カリムが恐々と自室の扉を開ける。するとそこには腕を組んで頭で船を漕ぐラムザの姿。

「……………」

「…ラムザさあゝん」

小さく呼んでみても返事はない。すっかり眠っているようだ。

「ラム、ザ、さん？」

「……………」

顔を下から覗き込むが返事はないし反応もない。

「…ふふ、眠っている時の男性の顔は意外に可愛らしいものですね」

「全く嬉しくない誉め言葉をありがとう」

「っ!？」

頬をつつきながら呟いた言葉は返事を期待したものではなくカリムのただの独り言。

しかし予想に反して返ってきた反応に、カリムは一步後ずさった。

「お、起きていらしたんですか!？」

「まあな」

「…全然気付きませんでした」

カリムが肩を落とす。

「気にするな。それより随分な扱いをしてくれるじゃないか騎士カリム。寝ている人間にちよっかい出すのが騎士のすることか？」

「ひゃっ!？」

仕返しとばかりにラムザがカリムの頬を横へ引っ張る。

「お、よく伸びる頬だな」

「いひゃいでふよ〜」

うう〜、と唸るカリムはラムザを睨み上げるが、残念ながららまったく怖くない。むしろファンが見れば悶絶ものの可愛らしさを誇る。しかしそれは良心の呵責、罪悪感を擽るには十分な力を持っていた。

「悪い悪い。あまりに直接的な抵抗が無くて、つい」

「つい、じゃないですよ、もうっ」

腰に手を当て、カリムは頬を膨らませる。私怒ってます、という風にはとても見えない。

ということで、ラムザは話を代えることにした。

「よし、取り敢えず飯だ。よく考えてみりゃ、あんま時間もないしな」

腕時計の示す時間は既に午前七時を越えている。普段カリムが朝食を取る時間は六時半。三十分の遅刻である。

「そういうことは早く教えて下さい！」

「俺だって今気付いたんだよ」

廊下を走るなんてみっともないことは育ちのいいカリムは絶対にしない。

よって二人は足早に歩いて朝食の間に急ぐのであった。



午前九時二十三分。

カリムは何故かソフトクリームを片手に公園のベンチに座っていた。隣には人気炭酸ジュースを持ったラムザが、同じくベンチに座っている。

「あの…」

「んー？」

「どうして私たちは此処に座っているのでしょうか？」

ぺろ、と小さな舌を出してカリムが買ってもらったソフトクリームを舐める。

「休養だ」

「お休みなら以前に頂きましたよ？」

「そうだな、確かに“二ヶ月前に”休んでたな」

カリムは実のところ、昨日で見事六十連勤という偉業を成し遂げていた。

カリムの補佐に入って僅か四日。既にラムザは管理局の人事部、あるいは聖王教会騎士団の人事部からは何度もつつかれていた。

「誰かのためになる仕事というものは何者にも代えがたい充実感があるものですから」

「だからって普通に土、日、祝日を休みにしただけで管理局の人事部から泣いて喜ばれるとか本気で正気を疑うからな」

「…あう」

「そりゃ休まなきゃ多くの人たちの役にはたつだろう。でもな、休まなかったらそれはそれで問題が起きた時に超過労働が問題になるんだよ」

そうなれば管理内世界の人たちからの信頼と信用が欠ける。そうなれば秩序の崩壊に繋がり、それはまた公共サービスの低下、違法魔導師の増加、治安の悪化を招く。

「要するに、お前がちゃんと労働基準法を守るのは長期的なスパンで見れば守るべき市民のためなんだよ」

「ですが…」

「それに上にいるお前が休まなきゃ下が休みづらいだろ？」

「…はい」

労働条件が悪いことを知れば当然若者の就職人数に影響が出る。その結果は前述通り。最終的には市民へのサービス悪化に繋がる。警察権と軍事権を持つ時空管理局は社会の規範でなければならない。上層部は一部の隙も見せてはならない。隙を見せれば獲物を見つけたピラニアが如く寄ってくるマスコミ連中がいる。

「特にカリム、お前ぐらいのレベルになると何処から隠し撮りされてるか分からん。ちよつとした失敗でも責任問題に結びつける奴らだからな」

かつて某国の閣僚が言葉の表現だけで辞任に追い詰められたのは管理局でも有名な話。時代や世界を問わず、腐敗したマスコミというものは存在する。

「例えば右のベンチ。おっさんが一人で新聞を読みながら座ってるが、ありゃ記者だな」

「…え？」

「バカ、見てんじゃねえよ」

言われた方向へと素直に視線を向けかけたカリムを注意しつつ、ハンカチでカリムの口を拭いてやる。特に汚れているわけではない。視線を向けさせないための演技。

「あの新聞紙でカモフラージュしてるが、あの鞆、隠しカメラつきだな」

「隠し…カメラ？」

「ああ。きっといつもはシャツハが警戒してるんだろうが、一応お前もそういった知識があった方がいいし、それに自分で警戒していることに越したことはない」

普段から聖王教会を張っている記者なら、シャツハが現在はカリムの側にいないことは周知の事実だろう。

そしてその代わりに側近として控えている男が果たして何処の誰かということも調べているに違いない。

大マスコミにはレティやリンディが後ろから圧力を掛けているが、個人単位となるとそうもいかない。

新聞紙や週刊誌は規制できても、ネット社会まではどうあっても規制することは不可能。

「…まったく、今代のトラバント家当主が敬虔な聖王崇拝者で良かったな」

そのお陰で、自分がカリムの側にいても疑いの目は避けられる。実際にカリムと接触している自分よりも、その上に立つ父親へと多くの記者の目は向かう。

管理局の少将を勤めるウォードⅡトラバントが同じく管理局の少将、

そして聖王教会の騎士を勤めるグラシア家の令嬢カリムⅡグラシアに接触する意味は何か、と。

「ウォード氏には私が管理局に席を置く際、大変お世話になりました」

「親父が勝手にしたことだ。俺には関係ない」

「そう仰られる貴方が今は聖王教会に所属なされておられるなんて、なんだか妙な気分ですね」

見惚れるような優しい笑み。
穏和なカリムの性格がそのまま表情に出ているかのようだ。

「気紛れな神様を呪わざるをえないな」

「それなら私は気紛れな神様に感謝せざるを得ませんね」

「………」

「こうして貴方に出会うことが出来ましたから」

ラムザの呆れた視線にも気付かず、カリムは買ってもらったソフトクリームを舐めた。

「初めて食べましたけど、ソフトクリームってこんなにも美味しいんですね」

「…そりゃよかったな」

毒気が抜かれるとはこのことか。大きなため息を一つ溢し、ラムザは公園の中心にある噴水を見る。
吹き上がる噴水は太陽の光を受けてキラキラ輝く。

「……………」

「ラムザさん？」

「…行くぞ」

「え？」

唐突に立ち上がったラムザがカリムの手を引く。

「あ、あのっ!？」

「いいから黙って歩け」

ラムザの歩みは早い。

躓きそうになるカリムを引き摺るように先へ進む。あの場にいたくないという拒否の意識がその様子に投影されている。

そして公園の出口まで十メートルを切る頃にはラムザの手には汗が滲んでいた。

残り三メートル。

遂に二人の背後から悪魔の声が届く。

「おんやあゝ、ひよっとしてそこにいるのはウォードん家のどら息子じゃないかなあゝ？」

ピタリ、とラムザの足が止まる。

背中からは嫌な汗が流れ、胸の動悸は異常に速い。

「おやおやおんやあゝ?」

「ひゃっ!?!」

「ちよっ、おい!?!」

「この横にいる頭の中がお花畑みたいなのはグラシア家のカリムかい? なにアンタ、いつの間にこんな上玉口説き落としたのよ」

「あ、あああああのっ!?!」

「…それにしても若いっていいわねえ」

後ろからカリムに抱き着いた女が頬擦りしながら胸を揉む。

「だあーっ、いきなり何してくれてんだよっ!?!?!」

「…ううゝっ!?!」

強引に二人を引き離れたラムザの背にカリムが隠れる。涙目ながらもカリムはラムザの脇から相手を見る。

光輝く金色の髪。豊満な胸とくびれた腰は女性として理想的な体型。しかし今は何故かその美しい顔を不機嫌そうに歪めていた。

「…アンタ、誰に向かってそんな言葉使ってるのか分かってんの?」

掴まれた腕を見ながら女性がラムザを威圧する。

「ぐっ…っ」

「随分と反抗的な目で見るとは思えない。気持ちよくてぞくぞくするわ」
女性は艶かしく自身の肢体を指でなぞる。唇から輪郭、首、鎖骨そして胸元へ手が動いていく。

「でもね、ラムザ」

女性の視線が鋭くなる。

不機嫌を通り越し、不愉快、更に不快の域に達すると、女性はラムザをどうしようもないクズを見る目で見る。

「アンタよりも私の方が絶対的に優位な立場にいることを悟りなさい。私はそんな風にアンタを相手との力量差が分からない雑魚に育てた記憶はないわよ」

およそ殺意すら感じられる視線が二人を射抜く。意志のない殺気ではなく明確な意志を持つ殺意。

かつては喧嘩に明け暮れる毎日を送っていたラムザの足が反射的に震え、今までシャツハという温室の中で育ったカリムは腰を抜かしてラムザにしなだれかかる。

親子が連れ添い、老人が腰を落ち着かせた平和な公園の中で、戦場のような緊張感が三人を包む。

「それともう一つ。アンタが他の誰かに対してどんなことをしようが構わないさ、所詮私には関係ない話だ」

——ただ、と女性が言葉を続ける。

「この私にだけは敬意を払えと教えたはずなんだけど？」

既に限界ギリギリ。思考は異常な回転で回り続ける。様々な予測と対策、そして対応をシミュレーション。結果、至った結論はただ一つ。

——取り敢えず一発殴っとう。

次の瞬間には絶対的な勝者として、地に倒れ伏したラムザを見下ろす女性の姿があった。

「…あ、相変わらず容赦ねえな、…おい」

「煩い、黙りなさい。今のアンタに言葉を発する権利はないのよ——」

——このバカ息子。

数年振りの親子の再会。

それは初対面の時と全く同じ構図で終結した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2569w/>

ー異伝ー魔法少女リリカルなのはStrikers～男たちの鎮魂歌～

2011年10月18日00時56分発行